黎　明

— SHINONOME —

2023年度

（松山東雲女子大学・松山東雲短期大学　チャペル・トーク集10号）

「われ、黎明(しののめ)をよびさまさん。」(『詩篇』57：8)

はじめに

『黎明』をお届けします。今年度は「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。」（エフェソの信徒への手紙四章四－六節）の聖句をもとに「ひとつの希望に」をテーマに掲げ、二二回のチャペル・アワーを実施することができました。ご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

チャペル・アワーは、近隣の教会、ご講話いただく講師の方々、教職員・学生の貴い奉仕により守られています。これからも私どもがひとつの希望を胸に歩み続けることができますよう、お祈りください。

松山東雲女子大学・松山東雲短期大学のチャペル・アワーの歩みを覚え、ご一読頂ければ幸いです。

目　次

〈二〇二三年度前学期始業チャペル・新入生歓迎チャペル〉
ひとつの希望に……………………………女子大学・短期大学　学長　高橋　圭三　4
〈イースター・チャペル〉
よみがえった声で
……日本キリスト教団松山教会　牧師／女子大学・短期大学　非常勤講師　上島　一高　15
〈開学記念チャペル〉
私のお金との付き合い方……………………松山東雲学園　理事長　丸木　公介　21
〈牧師招待チャペル〉
どう生きるか……………医療法人聖愛会松山ベテル病院　チャプレン　佐々木真理　29
分かち合う共同体を目指して～教会こども食堂とフードバンクの取り組み～」
……日本キリスト教団三津教会　牧師　森分　望　31
〈後学期始業チャペル〉
大きいことはいいこと？　小さなオルガンの話
……日本キリスト教団松山教会　牧師／女子大学・短期大学　非常勤講師　上島　一高　36
二宮邦次郎先生と今治の企業家活動―海事産業やタオル産業に残る軌跡―
……短期大学現代ビジネス学科　教員　西岡　久継　40

〈平和学習〉
平和のシンボル……………………日本ホーリネス教団広島福音教会　牧師　加藤　望　46
〈松山東雲学園創立記念フォーラム〉
独りから二人へ
……日本キリスト教団松山教会　牧師／女子大学・短期大学　非常勤講師　上島　一高　50
ウミガメのスープ……………………女子大学心理福祉専攻　教員　中川　祐治　52
〈アドヴェント・チャペルⅠ〉
必然の「たまたま」―ＳＤＧｓをベースとした海外医療協力の視点から
……………医療法人鶯友会牧病院　医師　宮川　眞一　58
〈アドヴェント・チャペルⅡ〉
さがしあてたのは
……日本キリスト教団松山教会　牧師／女子大学・短期大学　非常勤講師　上島　一高　66

二〇二三年度前学期始業チャペル・新入生歓迎チャペル

ひとつの希望に

女子大学・短期大学　学長

高　橋　圭　三

新入学された皆さん入学おめでとうございます。皆さんはこの東雲がキリスト教精神に基づいて建学されたことは十分承知していると思います。本日は二〇二三年度、最初のチャペルということで私がお話をいたします。

本学園の建学の精神は学園ホームページにもありますように「信仰・希望・愛」です。神を畏れ、神による希望に生き、神と隣人を愛する、自立した女性を育成することを目的として一八八六年九月一六日に松山女学校として創立されました。本日は「ひとつの希望に」ということでお話をさせてもらいます。この「ひとつの希望に」というのは新約聖書のエフェソ信徒への手紙第四章に示されています。

キリストの体はひとつ

そこで、主に結ばれて囚人となっている私はあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きに相応しく歩み、一切高ぶることなく柔和で寛容の心を持ちなさい。愛を持って互いに忍耐し、平和の絆で結ばれて、霊による一致を保つよう努めなさい。体はひとつ、霊はひとつです。それはあなたがたが、ひとつの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。

キリスト教の宗教家は別の解釈をするのかもしれませんが、素人の私はこの新約聖書の言葉、**その招きに相応しく歩み、**これを人の理に沿って人生を歩み。**一切高ぶることなく、**人としての節度を保ち、**柔和で寛容の心を持ちなさい。**常に穏やかな心で他人に優しく接する人生でありなさい。と解釈します。**体はひとつ、霊はひとつです。それは、あなたがたが、ひとつの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。**つまり、人類はひとつの希望に向かって歩んでいかなければならないのだろうということなのかもしれません。

希望

この希望という漢字の意味を考えてみてくださ

い。希望の「希」には「まれ」「ねがう」「こいねがう」「滅多にない」というような意味があります。そして希望の「望」は「のぞむ」「ねがう」「ほまれ」のような意味があり、「希望」で将来特別な何かを望み願うというような意味合いになると思います。しかし、滅多にない、稀な望みというように解釈するとどうでしょう。

私の専門は哲学や宗教学ではありませんので、その辺りの詳しいことはわかりません。しかし、滅多にない、稀な望みと理解するとこれは入学式の時にも話したように宇宙や自然の摂理あるいは愛のある平和な世界で、ただひとつの真理の探究というように理解することも可能なのではないでしょうか。

このただひとつの真理の探究を考えると平和な世界で人類を含めた全ての命あるものの、共存共栄が考えられます。人類に限定して考えると太古の昔より世界の至る所で文明が栄えそして滅びることを繰り返してきましたが人類は本当に平和のうちに共存共栄ができたのでしょうか。太古の文明はなぜ滅びていったのでしょうか。

皆さんは、社会科の勉強などを通して世界四大文明ということを耳にしているでしょう。この四大文明は知っての通り黄河文明、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明だと言われています。しかし、この「四大文明」と言う言葉は日本や中国だけで使われている用語で世界的には一般的ではありません。そして、これらの文明は現在まで、そのまま継続している文明はありません。これに加えて、中南米のマヤ文明、オルメカ文明、テオティワカン文明の総称であるメソアメリカ文明とアンデス文明を加えて六大文明とする場合もあるようです。中南米の文明はスペインポルトガルの侵略征服後植民地化され一五世紀以後はラテンアメリカ文明と言われています。それまでの土着の文明と西欧の宗教（カトリック）の融合した文明です。現在、文明は文化の総体であるとされていますが、反対にドイツでは一九世紀より文化は価値観や理想、高度な知的、芸術的、道徳的な社会の質に関わるものだとして文明の上位概念として文化を考えていたようです。しかし、多くの文明に関する見解としてはブローデルらを中心に「文化」を原始的で変化のない非都会的な社会と考え、複雑な形で発達し、活気ある都会的

な社会を文明だと考えたようです。
　政治学者のサミュエル・ハンチントンによればその著書『文明の衝突』で現存する世界の主要文明は七～八つの文明があるとしています。それは中華文明（儒教文明という場合もあるようです）、ヒンドゥー文明、日本文明、イスラム文明、西欧文明、ロシア正教会文明、ラテンアメリカ文明、アフリカ文明です。ここでいうアフリカ文明というのはかつての紀元前五世紀あたりから始まったエチオピア帝国の前身アスクム王国から一九七五年まで続いた帝国を除いて、第二次世界大戦後の西欧に侵入占領された植民地支配から独立後の文明をいいますが主要な文明研究者のほとんどはブローデルを除き、明確なアフリカ文明を認めていないようです。我々、日本の国の歴史はどうでしょうか。サミュエル・ハンチントンは日本文明を中華文明から派生し現在まで継続している独自の文明であるとしています。しかし、古事記や日本書紀を紐解くと日本には文献上では神代と言う時代があったようです。それより古い日本の超古代についてはどうでしょうか。遺跡等の調査研究から明らかになっているのは旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代が確認されています。遺跡発掘から分かったのはサミュエル・ハンチントンの日本文明以前からヒト社会を形成した痕跡があります。それらを文明と言えるかどうかは別ですが明らかに人が集団を作って共同生活をしていた痕跡があります。

　かつて日本の考古学では縄文時代以前の文化はないと思われていました。しかし、発掘された石器。群馬県の岩宿遺跡で一万年以上前の関東ローム層から一九四九年の発掘調査で二つの石器文化が確認されました。この打製石器は三万五千年前の後期旧石器時代のものであるということが分かっています。かなり古い時代から日本に人が集団で住居を構えて住んでいたことになります。これは日本列島の中でも最古の人類の遺物であるといえます。また沖縄で那覇市山下町の第一洞穴遺跡から約三万二千年前の化石人骨（山下洞人）が発見されています。白保竿根田原洞穴遺跡からは二万七千年前の人骨。そして、約二万年前の中石器時代の遺跡から見つかった港川人のＤＮＡは現代の日本人と直接繋がる祖先であることがわかっています。この時代を文明とは言えないかも知れ

ませんが混血人種と言われている日本人は日本列島で三万年以上前から連綿と人類の営みを継続していたこととなります。

縄文時代は今から一万六千五百年ほど前から二千三百年前。それから皆さんが社会科で習った四大文明の黄河、エジプト、メソポタミア、インダス文明。その後に古事記や日本書紀の記述によると初代の神武天皇の即位が二六八三年前。弥生時代は二千三百年前から千七百年前。西暦の開始は弥生時代の始まりの後です。古墳時代は千七百年前から千三百年前。

なぜ、こんな話をするかというと三万年前から日本列島には人が住んでいたという事実です。それに一万年以上続いた縄文時代ですが、彼らは集落を作り、複数の村として生活していました。そして北日本、北海道を中心にそれぞれの集落間で交易をしていた事実もあります。これらの遺跡から出土した遺物の中には人を殺める武器がほとんど見られません。太古の昔から北方、南方、大陸から多くの人々が日本にやってきましたが大きな争いもなく緩やかに混血を繰り返し現代の日本人となっているようです。沖縄で見つかった現在の日本人と共通のDNAを持つと言われる港川人ですが、その発掘調査から分かったことは、縄文時代以前から日本に住んでいた原住民と、緩やかな混血を繰り返してきたものと思われます。しかもこの混血は相手を征服し、隷属させるというような混血ではなかったことが先ほどお話ししたように闘争を思わせる人骨の損傷や武器の類が見つからなかったということからわかります。日本列島は島国で海には魚、陸には鹿、そして木の実等があり、それを狩猟採取する事で生活ができていたのだろうと思われます。縄文時代は狩猟採取の生活であるのに定住し入手した食料を分け隔てなく分配していたと思われます。お互いを大切に思い、希少な食べ物や資源を共有したからこそ縄文時代は一万年以上も続いたのではないでしょうか。群馬県の岩宿遺跡の石器をもし仮に日本人の始まりとすると水稲稲作文化が日本に伝わるまで小さな、対立はあったかもしれませんが、大きな争いのない、分かち合う平和な生活が続いたと言えます。

この石器時代と縄文時代の違いというのは土器と弓矢の使用、磨製石器の発達、定住化の始まり、

竪穴式住居、環状集落、定住生活、植物栽培等が始まったことで区別されます。石器時代に続く、この一万年以上続いた縄文時代はそれ以前も含めて、最初にお話しした今回のテーマでもある「ひとつの希望に」を具現化した時代です。誰もが共通に求める真理としての希望。つまり人類の共存共栄を誰もが求めていた時代。自然条件等から結果的にそのような穏やかな時代が続いたのだろうと推測できます。そして、新しく仲間に加わった異邦人も温かく、同じ仲間として迎え入れていたのではないかと思われます。後からやってきた異邦人は先住民を蹴散らし、征服しようとしてやってきたのかもしれませんが、日本列島の資源や大陸や南方に比べ、決して豊富であると言えない食料事情など生活の効率を考えると先住民と闘争で血を流し、人手・働き手を減らす戦略よりも、緩やかな混血で融合し、先住民の知恵を得ることが得策であると考えたのかもしれません。日本の言い伝えに「郷に入れば郷に従え」と言う表現がありますが、これは決して先住民族が後からやってきた異邦人へ向けて威圧する言葉ではなかったのではないかと思います。反対に後からやってきた異邦人がその土地で定住定着するための知恵ではなかったのではないでしょうか。異邦人からすれば先住民は我々異邦人を受け入れてくれるのだから先住民の日本の風土気候、自然に効率よく適応して生活する知恵を学ぼうじゃないかと言うことなのかもしれません。

　さて、「ひとつの希望に」の言葉が示されているエフェソ信徒への手紙の中に教会がキリストの身体であると記されています。イエス・キリストである教会は人種や国籍、言葉や文化、男女や年齢差などの多種多様なキリスト者を認め、「キリストにおいてひとつとなる」「キリストの身体はひとつ」と示しているように、ひとつになって求めるものは真理であり、それがひとつの希望ということなのであろうと考えます。そう考えると、縄文時代以前から始まった、日本人の混血と生活の知恵の融和はこの時代の人類が日本という自然、風土に順応していった過程であるとも言えます。ただ、これを上下の権威関係の維持強化あるいは縦社会の「和」と捉える人たちもいます。しかし、闘争や争いが少なかったことを考えると、資源の少ない日本の環境風土に効率よく順応適応

していった過程と考えることの方が妥当なのではないかと思います。争いや上下関係が見られ始めたのは弥生時代に水稲稲作が始まってから、備蓄可能なコメという、財産を持つものと持たざる者の差が出来たからだと思います。

さて、戦後一九四五年から一九五二年まで敗戦国の日本を占領していたGHQ連合国最高司令官司令部の労働局諮問機関「十一人委員会」の一員だったヘレン・ミアーズは一九四八年に出版したMirror for Americans: JAPAN「アメリカの鏡日本」で西欧の白人文化は消費すること、領地を拡大することを美徳としていたが、古来より日本人は物を大切にし、少ない資源を有効に利用することを美徳としていたと記載しています。まさに、今世界が目指しているSDGsを太古の昔より日本人は実践してきたのだと思います。

SDGsは二〇一五年の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された二〇三〇年までに持続可能でより良い世界を目指す国際目標で、一七のゴール一六九のターゲットから構成されます。そして、誰一人残さないことを誓っていることを考えると明治時代以前の概ね、日本人が当たり前に行っていた普通の生活だと言えます。ペリー提督の黒船来航以後、急速な近代西欧化を進めてきた日本は徐々に古い日本人の心をどこかに押しやりつつ現在まで歩んできたように思われます。アフリカ人女性で史上初めてノーベル賞を受賞したワンガリー・マータイさんがゴミを出さないために「3R」リデュース（ゴミを出さない工夫）・リユース（ゴミにせず繰り返し使う）・リサイクル（ゴミを再生利用）を訴えたことは知っての通りです。さらに、二〇〇五年来日した際に3Rにリスペクト（大切にする）を加えた4Rを加えた言葉だとして日本語の「勿体無い」を世界の共通言語として広めたいと言ったそうです。いくらゴミと言ってもゴミにはゴミの尊厳があり大切にしなさいよと言うことなのでしょうか。

この勿体無いと関連するかもしれませんが明治時代以前の江戸時代は貨幣、お金の価値よりも米がより意味のある価値として取り扱われていました。士農工商と言われるヒエラルキーはそれを如実に表しています。米を生産する農民が武士の下で、職人や商人より地位が高かったのです。同じように武士の給料、或いはひとつの藩を預かる城

主の格も米の取れ高である「石」で表していました。大陸のように人の割合に対してより多くの資源や、有り余る土地に住むのとは異なって、人口密度に比べ土地・資源の少ない日本は貨幣経済よりも直接的で生きていく上に重要な米。そして、資源、土地、物に価値を置いていた時代が長く続いたと思われます。本学の前身である松山女学校が始まる前、神戸女学校を卒業したばかりの増田シズが二宮邦次郎の元で食べることと寝るところがあれば給料は要らない女子教育のお手伝いをさせてほしいと申し出たのはこの古い日本人の生活感、生き方そのものだったのではないかと思います。ＧＨＱのヘレン・ミアーズが言うように物を消費するのではなく、少ない資源を最後まで有効活用する日本人の特性。貨幣経済、物質文化の豊かさよりも精神文化の豊かさを美徳とするのが「勿体無い」と言う言葉に表現されていると思います。日本人には当たり前の、この「勿体無い」は経済的、金銭的豊かさよりも自然と共存する生活の中の精神文化に重きを置いた生き方だったのではないでしょうか。私はニュース以外、あまりテレビを見ません。しかし、唯一と言ってもいいかもしれない好きな番組があります。「ポツンと一軒家」退職後はあのような生活をしてみたいですね。ポツンと一軒家に出てくる住人のおおらかさと自然体には毎回感服させられてしまいます。話を元に戻すと、勿体無いと同じように「ありえないほど貴重です」と言う意味で感謝を伝える言葉「ありがたい」そして、あなたの存在・好意によって今の私が生きていけると言う意味の「おかげさま」またあなたのミスは私のあなたへの関わり方のミスでもあるので気にしないでくださいと言う意味で「おたがいさま」これらの言葉は日本人として日常的によく口にしてきた言葉ですが、ＧＨＱの占領下で古い日本人の心を歪められてしまったことをヘレン・ミアーズは指摘しています。

さて、本学の建学の精神のひとつでもある「愛」皆さんは現代に生きる若者なのでそれほど抵抗はないかと思いますが、仏教文化が盛んなころの日本では愛を仏教の百八つの煩悩のひとつと考えていました。愛は心の中から追い払うべき煩悩だったそうです。しかし、キリスト教の愛は神から平等に与えられるものであり、隣人に対する愛は見

返りを求めるものではないと言われています。本学は聖書の考え方を生活の指針とするプロテスタントですが、カトリックのキリスト教はボランティアや献金など見返りを求めない奉仕に生きることが強く求められるようです。ところで、日本にこのキリスト教の愛に似通った対人関係についての概念があります。それは、恩です。これは儒教の五常（仁、義、礼、智、信）を日本流に解釈したものなのかもしれません。キリスト教でいう愛は主の愛、神の愛、隣人への愛、これらの愛は俗な言い方をすれば返済無用です。さらに俗っぽく言うと見返りを求めない一方通行の愛です。神からの愛に対する返済義務はありません。同じように両親の愛に対する返済も欧米社会では聞いたことがありません。しかし、日本の恩に関しては「恩返し」と言われるように手厚い待遇や大切にして頂いた、認められた、「あなたを大事に思っているよ」という気持ち等、他人から私に提供された行為の関係性に対して恩に報いると言う言葉があります。この日本人の使う恩には返済義務があるようです。このことは小さな島国での人間関係を円滑にするためのコミュニティー内でのスキルだったのかもしれません。このことは先ほど縄文時代以前から連綿と伝わる日本人の本来の自分達の生き方と融合させていく中で全てを受け入れる生き方なのかもしれません。しかし、世界には融合というよりも完全に外来の生き方を受け入れていく生活様式もあります。ラテンアメリカが一五世紀以後西洋の列強国に侵略されかつての文化文明が破壊され白人文化に入れ替わったように、アフリカ・アジアも植民地化された国がほとんどです。かつて三〇年ほど前のことですがフィリピンに観光で遊びに行った時のことです。フィリピンのセブ島に近接する島でマクタン島という小さな島があります。ここは国際空港があるにもかかわらず、かなりの田舎ですが、海岸沿いには外国人観光客が利用するホテルが立ち並んでいます。そして、このマクタン島はマゼランが最初に上陸した島としても有名です。このマクタン島にラプラプというところがあります。ラプラプというのは一五二一年四月二一日「マゼラン島の戦い」でキリスト教（カトリック）への改修と服従を迫るマゼランを撃退した英雄ラプラプ王のことです。東アジア人としてヨーロッパ人に初めて勝

利したと伝えられています。このラプラプ王の像のあるところとは違う海岸近くに現地人が誇りに思う記念碑がありました。場所は今でははっきり覚えていませんがあまり観光客が訪れない観光ガイドブックにも載っていないところです。ホテルのスタッフに交渉して彼のバイクを彼の勤務が終わるまでレンタルしました。レンタル料は確か当時日本円で五百円ぐらいだったと思います。臨時収入の入った彼は大喜びでした。フィリピンは50ccでも二人乗りはOKですし、ヘルメットも不必要です。そのバイクで海岸沿いをドライブしていてそのマゼラン上陸の記念碑を見つけました。記念碑の面にはマゼラン上陸の偉業について記載されていましたがその裏にはこのラプラプ王のことがこっそりと現地の人しかわからないように書かれていました。欧米の観光客はほとんど居ません。たまたま、そこにいた現地の親子、娘さんは小学校低学年ぐらいでしょう。そのお母さんは我々が日本人であると知ると娘さんに裏に書かれてあるラプラプ王に関する碑文を読むように勧めていました。彼女は姿勢を正して我々にそのラプラプ王が如何にマゼランを撃退したかの武勇伝について胸を張って読み上げてくれました。この争いで一五二一年四月二七日マゼランは戦死したようです。しかし、マゼランたちの鉄砲と剣や竹槍では最終的には勝負になりません。最終的にフィリピンは以後四百年間、植民地となり、現在でも90％のフィリピン人はカトリック教徒のようです。

ラテンアメリカやアジア、アフリカの欧米の植民地施策のことを考えると力による征服と植民地という名の搾取で西欧の列強は国の財力を豊かにしていった過去の歴史があります。しかし、その影響を多く受ける事なく、日本は江戸時代に鎖国という施策で古くから伝わる物を大切にする独自の文化を花開かせたのではないかと思います。先ほど紹介したGHQのヘレン・ミアーズの著書「アメリカの鏡日本」にある一文を紹介します。

私たち（アメリカのこと）が終戦後日本に来た目的は、軍国主義的侵略性をもって生まれた日本人を「改革」することである。この「生まれつきの」軍国主義なるものを、日本人の過去に求めるとすれば、一六世紀、朝鮮に攻め入った孤独な将軍の失敗の記録ぐらいのものだ。しか

し、この遠征をとらえて日本民族を生まれつき軍国主義者と決めつけるなら、スペイン、ポルトガル、イギリス、オランダ、フランス、ロシア、そして私たち自身のことはどう性格づけしたらいいのだろう。これら諸国の将軍、艦長、民間人は一五世紀から、まさしく「世界征服」を目指して続々と海を渡ったではないか。日本とアジアの目で見ると、日本に歴史的侵略の罪を着せる私たちの姿は、自分のガラスの家を粉々に壊している立派な紳士だ。私たちの非難は、むしろ、明治までの日本がいかに拡張主義でなかったか、これに対してヨーロッパ諸国がいかに拡張主義であったか、を際立たせる。

豊臣秀吉の軍隊が朝鮮から追い払われた同じ時期、スペインはペルーとメキシコを征服し終え、フィリピンに地歩を固めていた。ポルトガルは世界を駆け巡り、ジャワ、インド、マレーの沿岸地帯、マカオ、中国沿岸部に及ぶ広大な帝国を築きつつあった。イギリス、オランダはスペイン、ポルトガルと競いながら、徐々にポルトガル領の大部分とスペイン領の一部を収め、中国、日本を目指していた。一七世紀初め日本が孤立主義にこもったのは、ヨーロッパ諸国の「歴史的拡張主義」のせいなのだ。

このように記載されています。

皆さんは大学生である間にどのような生活を望みますか。あなたにとってのひとつの希望とは何でしょう。ボブ・トビンという作家がポジティブ・インパクトの著書の中で次のようなことを言っています。

■本当にやりたいことをしているか？

■一番やりがいを感じることは何か？

■自分の生き方に満足しているか？

■自分自身が求めるような友人になれているか？

■際立った仕事をするために全力を尽くしているか？

■人にポジティブな影響を与えているか？

■どんな変化を起こしたいか？

しかし同時に、この三年間ほどコロナ禍により、日常の生活に多くの制限がありました。孤立せざるを得ない状況下で如何に地域社会、あるい

は世界の中での共存共栄を考える事ができるでしょうか。どうしても孤独を感じる機会が多くなるような気がします。世界で最も深刻な健康危機は何でしょうか。それは癌ではありません。オバマ大統領の下で公衆衛生局長官を務めていたヴィヴェック・マーシー博士によると、それは孤独です。孤独は流行病です。私たちは、人類の歴史上、技術的に最も他者とつながった時代に生きていますが、一九八〇年代以降、孤独を感じる人の割合は倍増しています。今日、米国の成人の40％以上が孤独を感じると答えていますが、孤独を感じている人の実数はもっと多いことが研究で示唆されています。さらに、生涯の親友がいると答えた人の数は、過去数十年にわたって減り続けています。平和な社会で共存共栄を求めるために我々に何ができるでしょう。現在でも外国では戦火に追われる人々がいます。私が大学生だった頃、まだベトナム戦争が継続していました。日本では「ベトナムに平和を市民連合」通称べ平連と言う平和活動がありました。当時の友人から聞いた話ですが、べ平連はベトナム戦争で「もう人を殺すのは嫌だ」と言って軍隊を脱走した兵士の逃亡を支援する団体でもありました。国が戦争を始めるにはその国にはその国の正義と正当な理由があるはずです。脱走というのはその国策に違反するわけですから犯罪であることは間違いがありません。しかし、兵士が軍隊を脱走すれば犯罪ですが、兵士が人殺しは嫌だと言って脱走することと殺人どちらがより大きな犯罪だと思いますか。

最後に一九六〇年代から平和を歌い続け二〇一六年にノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランの「風に吹かれて」を流します。

下手な翻訳ですがボブ・ディランが伝えたいことが分かってもらえれば嬉しいです。

（二〇二三年四月一一日）

風に吹かれて
どれだけ歩けば、一人前と言えるかな?
白い鳩はどれだけ海を飛んでいけば、砂浜で休めるのだろう?
どれだけ砲弾が飛べば、銃を手放す事ができるかな?
仲間よ、答えは風に吹かれている、答えは吹く風の中
山はどれくらい長くそこにあるのか、海に侵食されるまで?
人はどれくらい長く生きれるのか、自由になれるまで?
人は何回、顔を背けるのか、何も見ないふりして?
仲間よ、答えは風に吹かれている、答えは吹く風の中
人は何度見上げれば、空が見えるのか?
人はどれくらい耳があれば、人の悲しみが聞こえるのか?
どれだけ人が死ねば、死んだ人の多さに気づけるのか?
仲間よ、答えは風に吹かれている、答えは吹く風の中

イースター・チャペル
よみがえった声で

日本キリスト教団松山教会　牧師／
女子大学・短期大学非常勤講師

上　島　一　高

ヨハネによる福音書二〇：一一―一八

クリスマスと言えば、ツリー、ケーキ、プレゼント、クレーシュ（＝クリッペ）、これはイエス誕生のミニチュアセット（馬小屋で生まれ、飼い葉桶をベッドにしたイエス、その傍に両親のマリアとヨセフ、そして、見守る天使、野原からやって来た羊飼いと羊、東の国からやって来た三人の博士）です。最近では木の葉・枝・花によるクリスマスリースも。

クレーシュの方は、新約聖書の前半、イエスの生涯を描く四つの福音書のうち、ルカおよびマタイの福音書の記事を合体させたもの。ルカはイエスの誕生が馬小屋の飼い葉桶だとし、マタイは星に導かれてやって来た博士が王様の宮殿に立ち寄るも、そこが目あてではなく、さらに先に進んで、都の外の生まれた幼子にたどり着く。でもそこが光の中心に。

◆では、**イースターと言えば？**　クリスマスにはとても敵いませんが、日本でも最近は注目されてきました。みなさんは何を思い浮かべますか。イースターエッグ。ゆで卵だったり、卵型のチョコだったりします。松山教会ではクリスマスツリーに使う木に、卵の殻に装飾したものを吊り下げて、イースターツリーにするのが恒例です。

うさぎもイースターを象徴します。多産、多くのいのちを生み出すからですね。わたしは教会学校（こどもの教会）の中学科で初体験したのはエッグ・ハント、朝早く、先生たちによって、近くの川辺の葦が生えているところに連れられて、そこで、隠された卵（と言ってもゆで卵）を捜したものです。「隠れていたいのち、みーつけた！」と。

ところで、いのちが隠れていたわけは？　クリスマスの幼子は成長すると、新しい光を指し示します。即ち、社会を治める人々の力や権威によって日陰者にされ、排除されて来た人々に、いのち

の尊厳を告げ知らせるのです。「あなたは大事だよ」と。ところが、力や権威の中心である人々は、そんなイエスの存在を許さず十字架で処刑。光は失われました。

ところが、死んだイエスが復活した、消えた光が再び輝いたというのです。イエスが指し示した「人々のいのちが大事だ」の方こそ最終的な答えだったのです。力や権威ある者たちは、彼らのいのちをどうにでもできると思っていたけれど、そうではなかった。イースターは、単にイエスが生き返ったという話ではなく、すてきな、いのちの勝利の物語なのです。

◆先ほど読んでいただいたのは、ヨハネが伝えるイエスの物語の最後の方。イエスはそれまで、大事にされずに外に追いやられていた人々と出会い、「あなたは大事だよ」と全身で伝えてきました。ところが、やがて、そんなイエスが、一部の人々を追い出してでも社会の掟を動かしたくない人々によって、十字架刑で排除されてしまうのです。

しかし、イエスの物語は、イエスの死で終りになりません。イエスは十字架から降ろされ、墓に葬られるのですが、それを見届けたマグダラのマリアが重要な証言者となるのです。おそらく彼女もイエスから「マリア、あなたは大事」と呼びかけられて、言わば再生させられた女性でした。しかし、そのように彼女を変えてくれた先生を喪い、今は絶望の中です。

彼女は、せめて、先生の遺体に香油を塗ろうと準備して、その日、夜明けを待ちかねて墓へと急ぐのですが、墓を塞ぐ石が取りのけてあり、イエスの遺体がないのを見て、まず、他の弟子たちに伝えます。その後、彼女はイエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使を見つけます。

「なぜ泣いているのか」と問う天使に、マリアは「わたしの主が取り去られました」と答えます。そう言いながら後ろを振り返ると、墓の管理者が立っています。管理者が「なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」と尋ねると、マリアは「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが引き取ります」と返します。

しかし、それに対する答えはありません。マリ

アは再び空っぽの墓へと視線を戻します。墓穴は、マリアの心にぽっかりあいた穴のようでした。その時です。その人がマリアの背中の方から声をかけます。「マリア」。彼女には、それが、忘れもしないあの方が彼女を呼ぶ声。かつて、生きる場所を追い出され、奪い取られていた彼女の声を、甦らせてくれた方の声。

「マリア」と呼ばれた時、彼女は、かつて彼女のうちに甦り、その全身から初めて発した声そのままに、イエスに返します。「ラボニ〈すなわち〈先生〉〉」。それは、管理者だと思っていた時の問答の声とは、声量も調子も全く違うもの、人格の響き合いを帯びた声でした。「マリア」、「ラボニ」、二人は呼び交わします。

◆思い出すのは、今治めぐみ幼稚園の園長をしていた頃、園児たちと一緒に歌ったある曲です。『幼児さんびかⅡ』という曲集に載っているのですが、「♪一人ひとりの名を呼んで」です。特に一節が好きなので、歌ってみますね。**「一人ひとりの名を呼んで　愛してくださるイェスさま　どんなにちいさなわたしでも　おぼえてくださるイェスさま」**。

こどもたちがイエスと面識があるというわけではなく、名前を呼んでもらったわけでもありません。でも、親から、先生から、ともだちから呼んでもらった経験を、このさんびかを歌いながら想い起して、うれしくなるのです。さらには、園で聖書のお話を聞いてイエスを身近に感じているから。わたしの場合は次のいくつかの例を想い起こします。

わたしは、「かみじま　かずたか」ですが、父親や母親からは「かずたか」、幼稚園の先生からは「かずたかくん」、幼稚園の頃の同級生、大柄で包容力のあった女の子からは「かったかくん」。親や幼稚園の先生からは今も呼ばれますが、昔呼ばれた声と重なります。友人の声は思い出すと懐かしい。めぐみ幼稚園の園児たちも同じだったでしょう。

◆ふと、昔読んだ本を思い出しました。竹内敏晴さんの『ことばが劈（ひら）かれるとき』一九八八ちくま文庫。もともとは思想の科学社より一九七五年に出版されていますから、五〇年近くに前出た本だとは驚きですが、一〇年前には彼の選集が編まれる程で、古びない内容を持っています。

本の「はじめに」はこんな風に始まります。「はじめにチヨコちゃんのことを語りたい。チヨコちゃんは、いま、新潟の心身障碍児の療育施設にいる小学校六年生である。彼女とのつきあいは、つるまきさちこさんを通して、間接に始まった。」そして、「凍っていたノド」という小見出しで「つるまきさちこさんの（チヨコちゃんについての）報告」が続きます。

「チヨコちゃんは、こえは出るけど、ことばにならなかった。発達おくれの子として入学した。三年生になったとき、竹内敏晴さんと菅井健さんとの対談「対人関係の認識を探る／ことばがひらかれるとき」を聞く機会があって、竹内さんの発声訓練の工夫の話も出た。それで、さっそく教室で応用してみた。」

「ただ、『ア──』と声を出すだけの稽古なのだが、『正面の黒板をつき通して隣の教室の伊藤先生のおでこにア──のこえをくっつける』という課題が第一」、さらに、第二、第三の課題。チヨコちゃんは、はじめは『ア、ア』ととぎれとぎれの声しかでなかったのが、一回ごとに長く張りのある『ア──』になっていった。」

「あんまりきれいにこえを出すから、いつもみんなで歌う〈アイウエオの歌（朝日が明るい）〉も、もう歌えるかなと思いついて、促すと、とたんにカスレ声になってとぎれてしまう。その後、竹内さんに電話した。」すると「『朝日が明るい』などというのはチヨコちゃんには何の切実さもないことで、体の中に動いてくるものが何もないでしょう」と竹内さん。

「『隣の教室の伊藤先生のひたいにくっつけよう』、それでチヨコちゃんは全身が黒板の向こうに飛んで行った。彼女は大きな〈こえ〉を届かせようとしたのではない。〈からだ（こころ）〉をひらいて先生のひたいに着いた。（それ）は当然のことなのだった。」その後、チヨコちゃんはやがて、声を出す嬉しさだけでなく、誇りも感じるようになって行く。

チヨコちゃんは、つるまきさちこさんが、試行錯誤しながら彼女の感情に呼びかける声を聞いて反応し始める。そして、チヨコちゃん自身が伊藤先生を、また、誰かを呼ぶ声を出せるようになる。こうして、彼女はその凍っていた声を融かしただけでなく、誰かとつながることや、自分に誇

りを持つことまで、ぐんぐん成長を遂げていくのです。

◆もう一つ、もう、ずいぶん古くなってしまいましたが、『天使にラブソングを』という映画が一九九二年に公開されました。印象的なのは、蚊の鳴くような小さな声だった華奢な女性が、声を取り戻すというか、自分の声の可能性を切り拓かれ、抜けるようなソプラノの高音を歌い切る所。

彼女は、シスター（修道女）・メアリー・ロバート。服装が他のシスターたちと一人だけ異なり、胸には銀の十字架のネックレスをかけています。主人公の訳あり偽シスター・デロリス（彼女自身も変わりますが）の歌唱指導で引っ込み思案から、大変身を遂げるのです。

元々追われる立場で入り込んだ修道院でしたが、居所がばれて捕らわれの身となったデロリス。しかし、彼女によって眠らされていた可能性を甦らされ、声を与えられたメアリー・ロバートの勇気はシスターたちを動かし、デロリス救出に向かうのです。その結末は？

みなさん、このメアリー。英語読みだからメアリーですね。今日のヨハネによる福音書に出て来たマグダラのマリアは英語では。そうメアリーです。どちらのメアリーも回復した声で、大切な役割を果たして行きます。

◆最後になりますが、マグダラのマリアが、イエスによって甦らされた声を、失望の中で喪いながらも、新たに、「マリア」と彼女の名を呼ばれ、「ラボニ（先生）」と体全体で応える声を再び取り戻す物語の中にこそ、復活というものがあります。復活は、球根の中に秘められている花が咲くドラマのよう。復活は、いのちの豊かさ、力強さを物語ってくれます。

だから、復活は〈死んだ人が生き返った〉話ではありません。イエスにだけ起きることでもありません。ヨハネによる福音書は言います。〈復活はあなたの中に起きる出来事です〉と。〈あなたには、あなたの声を甦らせる呼びかけが聞こえ、あなたは甦った声を出せるはずです〉と。マグダラのマリア、チヨコちゃん、シスター・メアリー・ロバートのように。

さあ、松山東雲女子大・短大での、この庭での学びや交わりもいよいよ本格化して行くことでしょう。互いの出会いも、マリアが園丁と思って

いた時の声のように、ただ情報をやりとりしているのではなく、イエスの声と認めてからのように、〈よみがえった声で〉生き生きと、お互いに魂をぶつけあい、交わし合えるといいですね。

◆最後にもう一度、「♪一人ひとりの名をよんで」を歌いますね。

（二〇二三年四月一八日）

開学記念チャペル

私のお金との付き合い方

松山東雲学園　理事長

丸　木　公　介

この度は皆さんの前でお話しできる機会をいただきましたので、私のお金の付き合い方を少しお話しさせていただきたいと思います。私には子供が三人おりすべて男です。現在一番下の三男も三六歳になっているのでみんな自立して生活しております。人生のサバイバルを生きているようです。三人ともいろんな悩みを抱えながら生きているのではないかと思います。

ある日次男と雑談をしているときに、次男が「仲の良い友人がすごい高級車をローンでかった」と言ったので、お金についての考え方に触れることになりました。お父さんだったら「現在の持ち金で買える範囲の車を買うね」なぜかというとローンで買うということはローンを完済するまでその返済に追われ自由が奪われるし、かつローンには金利がありそれを余計に払わなければならないので、自分の現在の経済力を目いっぱい使わずに余力を残しておくようにする方が精神的な自由が得られるからといいました。

ちなみに私は高校時代に二輪車の免許をとりバイクが欲しくてたまりませんでした。同級生がいいバイクに乗っていると、うらやましくてたまりませんでした。高校を卒業したら二輪車の販売で世界一の会社である本田技研工業株式会社に就職して当時のバイクの最高機種　ホンダCB750FOUR 通称ナナハンを買おうと思いました。そこで高校を卒業して本田技研工業株式会社浜松製作所に就職しました。しかし、実際に購入したのは最初の給料で購入できる中古のダックスホンダという六五ＣＣのバイクで二万五千円のものでした。ナナハンの当時の値段は三八万五千円でした。今から五四年前のことになります。

夢にも見たホンダのナナハンをなぜ購入しなかったかというと、当時のわたしの給料は初任給が月額四万円弱でしたので、当然ながらローンを組まなければ購入できず、それを完済するためには何年もかかり、その間給料の大部分を払い続けなければならなくなります。ローンの返済のため

に仕事をしているようなことになってしまうのが嫌だったのです。そんなことに縛られたくはないと思ったからです。その時はローンに金利がついているなどという知恵はなかったのですが、物質的な満足よりも精神的な自由が欲しかったのだと思います。

ところがこの時二万五千円で買ったダックスホンダというバイクはなかなかの名車で面白いバイクでした。

本田技研工業株式会社は大変いい会社ではありましたが三交代の労働は私には向いていなく三か月ほどで退職してしまいました。私は高校時代新田高校で運動部に所属し体力には自信があったのですが、仕事というものは、そういうものではないということを痛感しました。

これ以降のことは、また日を改めてお話しするとして、本日の本題に戻りたいと思います。ローンを組むということは、つまり金利（投資金額に対して支払われる年間利息の割合）を払うことなのです。この利息ですがこの利息を甘く見ないで欲しいと思います。自動車会社の決算書を見てみると自動車会社なのですから車や二輪車を製造し、それを販売することで儲けることが本来でありますが、よく見ると、顧客が製品を購入する際のローンやリースのサービスの提供である金融サービス事業で多くの利益を上げています。例えば本田技研工業株式会社の二〇二二年三月期の決算ですと会社全体の営業活動から得られた利益いわゆる営業利益は八、七一二億円ですが、そのうちの三、三三〇億円は金融サービス事業つまり顧客が製品を購入する際のローンやリースのサービスの提供から得られた営業利益です。会社全体の三八・二％です。つまり端的にいえば、会社全体の営業利益の三八・二％はお金を貸して儲けているのです。ちなみに本田技研工業は二輪事業、四輪事業、金融サービス事業、ライフクリエーション事業及びその他の事業があり二輪事業の営業利益は三、一一四億円、四輪事業の営業利益は二、三六二億円、金融事業の営業利益は三、三三〇億円、ライフクリエーション事業及びその他の事業の営業利益はマイナス九四億円となっています。金融事業つまりローンやリースによる儲けが一番多くなっています。

私たち消費者は、この事をよく考えて消費行動

をしなければなりません。

このローンの金利は、四％から八％です。一〇〇万円のローンを組むと年間四万円から八万円の利息を支払うことになります。これを皆さんがアルバイトで稼ごうと思うと結構大変だとは思いませんか。そして、これを、お金を投資して稼ごうとするとさらに難しいのです。確実なものではこの金利ではまずありえません。例えば、銀行の一年間の定期預金にすると〇・〇〇二％から〇・三％の金利しかありません。つまり一〇〇万円を一年間預けて二〇円から三、〇〇〇円しかもらえないのです。正確に言うと二〇％の税金を差し引かれますので実際には一六円から二、四〇〇円です。資金を運用して四％から八％の収益を得るのは私たちでは大変だということがいいたいのです。そして気を付けて欲しいのは実際の世間では割のいい儲け話を聞きますがそんな楽をして儲かる話はほぼないと考えてください。

先ほどのローン金利で四％から八％、定期預金で〇・〇〇二％から〇・三％というように金利に差があるのは一般的にリスクと比例すると考えてよいと思います。要するに間違いなく返金されるものは金利が低くなっていると考えて良いと思います。お金を貸すということは、戻らない可能性もあるということです。

つまり簡単に儲ける話については、よくよく気を付けて欲しいと思います。やはり額に汗しないとなかなか利益は得られません。利益を得るには辛抱強く努力しないと得られません。

余談ですが、わたしはこの松山東雲学園の理事長でありながら、会計事務所を経営しています。私は松山で生まれ松山で育ちました。一八歳の時から東京を中心に関東方面で暮らし、公認会計士の受験勉強は東京で行い合格後は東京の監査法人で修業をしました。何れは故郷の四国松山で開業し故郷の企業、特に中小の企業の一助となりたいと思っていました。

三三歳の時に松山に帰省し夢の独立開業を果たしました。しかし開業するのは簡単でしたが、お客さんは、親友と親戚の二件のみで、ほぼほぼ開店休業の状態でした。その時は妻のお腹には三人目の子供がいました。監査法人勤務時代に独立開

業するために開業資金がいるだろうと思い必死でためた資金や開業資金で借りたお金もあっという間に無くなりました。そこで追加の資金を父が残してくれた土地を担保に銀行に借りに行きましたが貸してくれませんでした。その時に書類を銀行に取りに行きましたが、その返してもらった書類の上に涙がこぼれたのではないかと錯覚するくらい情けない思いをしました。

このことを母親に話すと、母親が銀行に定期預金を解約にいくと、銀行の人が「何に使うのですか」と母親に聞いたようです。そこで母親は正直に息子が会計事務所を開業してお金に困っているので、息子に貸してやろうと思っていると話したところ、その支店長さんがあなたの息子さんにはうちが貸すとの話があり、わたしも母親から借りると身内なので返せないかもしれないと思い銀行から借りることにしました。お金が必要なときにはなかなかお金を貸してくれません。実際にお金が使えるまでの期間がものすごく長く感じました。

このことからお金に困っている時には、他人はほとんどあてにならないことを身に染みて感じました。そんなある日友人の家族と共に近くの公園に遊びに行きました。天気が良くて穏やかな日で子どもたちは無邪気に楽しそうに遊んでいました。私はシートの上で寝そべってそれを眺めながら私の心は隙間風が吹いていました。せめて家族が食べていけるだけの収入が欲しいと思いました。

収入は少しずつしか増えません。ですので、支出は極力抑えました。子どもたちには、かわいそうなことをしてしまったと思っています。長男が小学校の時に仲の良い友達が塾に行っていましたが長男は行っていませんでした。長男は仕方なくその塾の外で友達が塾が終わるのを待っていたそうです。それを見た塾の先生が過去の問題を長男に渡しました。長男はそれを持って帰り母親に見せましたが、しかし、その塾には行かせませんでした。もう少し私に稼ぎがあれば行かせることができたかもわかりません。

ところで、独立開業した会計事務所ではいろんな仕事をさせていただきました。最初に顧客になったのは友人と親戚の叔母のところでしたが最

初に全く他人のところが顧客になってくれたのは、偶然の出会いでした。開業するために最初に事務所を借りたところ、その事務所の床のタイルが痛んでいたのでじゅうたんをその上に引くことにし、友人のところにそのじゅうたんを注文しました。それを納品するのに友人とそのじゅうたんの卸の営業マンと一緒に事務所にきて床に敷いてくれました。

そこで、その営業マンと名刺を交換しました。その営業マンが自分の会社に帰ったところ社長が現在契約している会計事務所を変えたいと言っていたそうです。そこでその営業マンが私を紹介してくれ、契約になりました。私の様な何の実績もなく、ただただやる気のみしかないものと契約してくれるとは、最初は信じられませんでした。

その会社に行き社長に何で前の会計事務所を変えるのですかと尋ねるとその社長は「ピンとこんのよ」と言っていましたが、その理由は私もピンと来ませんでした。そこで会社から伝票を預かり会計処理をして決算書を作成しようとしたのですがその伝票の仕訳では上手く行きませんでした。私は他に仕事もないためその仕訳の誤りを一つ一つ正して記帳をしました。その結果いくつかどうしてもわからないものもありましたが、その事実をありのまま社長に説明し報告しました。社長は会計の事はあまり詳しくありませんが自分の会社の事は分かっており、私のありのままの説明に合点がいった様子で納得してくれました。

その社長はやり手の社長で顔も広く、それから何件か顧客を紹介してくれました。そこで思いました。赤塚不二夫流にいえば「これでいいのだ」と思ったのです。このようにきちんと会社のありのままの姿が表現できるように記帳をし、社長の経営判断に少しでも役に立つように、社長の足元を少しでも照らすような仕事をしようと決意しました。

そんな時、この松山にもバブル時代（一九八五年から一九九一年）がやってきました。とにかく株式、土地、ゴルフ会員権等がぐんぐんと値が上がる時代でした。この時はいかに税金を安くできるかが会計事務所に求められましたが、私はこれにはあまり興味はなく、ただただ先の様に会社の状態をありのまま表現することが、会社にとって良いことであるとの信念で業務をしていました。

その為いくつかのお客さんは離れていく人もいました。

そんな時あるお客さんが相談に来ました。「銀行で借り入れをして土地を買えば、土地の値段は上がるし銀行の借入金の金利は会社の経費になり税金が安くなるので良いのではないか。」確かにその時の風潮はその通りでした。それに反対するのは何とも勇気のいることでした。この風潮がいつまで続くのか、いつ終わるのかなどは全く分からないためです。しかし、ちょっとおかしいのではないか。と思うのが精一杯です。現在を生きる私たちはもう結果をわかっているので、何が正解かが分かりますが、その時はとにかく、それを反対するのは勇気のいることでした。

そこで苦しんだ挙句、私は次のようにアドバイスしました。社長の言われることは、もっともですが、いくら何でもやり過ぎるといけないのでせめて社長が店を出店するために良いと思えるところのみにされては、いかがでしょうか。「過ぎたるは及ばざるが如し」です。

そうこうしていると、バブルが崩壊して今度は株式、土地、ゴルフ会員権の値段がみるみる値下がりしていきました。そこで、困ったのがそのバブル景気にのって借り入れをして（その時は、銀行はいくらでもお金を貸してくれるようでした。）株式や土地を買った人たちです。無理のない借り入れをしたところは、バブルが弾けても何とか返済できるので良かったのですが、無理をして借金をし、土地を買いビルを建てたところがその返済に苦労しました。その社長さんからは何度となく「あの土地を買わなかったらな～」「あのビルを建てなかったならな～」という言葉を聞きました。

そのバブル崩壊の後処理では、本業のみであればまずまずやっていけるのに、借金の返済やその金利の支払いに追われ大変苦労をしておりました。それでも、なんとかやりくりできたところは良いのですが、結局倒産したところも残念ながら見てきました。バブルの時にちょっと儲けただけで、あとは大変苦労したところも何件か見てきました。

「人の行く裏に道あり花の山」これは、株式投資の格言でありますが、事業でも人生でも同じことが言えるのではないかと思います。

さて、私たちが直面する事は、どういうことがあるでしょうか。親友がお金に困っている時にお金を貸すことが友情かどうか、大体においてお金を貸すことによって友情関係がなくなることがほとんどです。その場合は、余裕があれば、お金を貸すのではなく、いくらか贈呈する方が良いと思います。

また、住宅を購入するときにどう考えるか、サラリーマンの最大の購入となることが住宅の購入です。住宅も賃貸か購入かとの選択がありますが、そこに長い間住むのであれば購入という選択が良いと思いますが、はっきりしない時は、迷います。何らかの理由で、それを売却することになった場合、時価が上がっていれば問題ないのですが、時価が下がって売却額でローンを完済できなければ、ローンのみを支払わなければならなくなり、かつ移動後の家賃も支払わなければならないので、大変です。

家賃を支払うのであれば、その住宅に住まなければ契約を解除して家賃を支払わなければ、良いのですが、住宅をローンで購入すれば、ローンはいったん契約を結んでそれを実行すれば、完済するまではそれが残ることになります。完済すればあとは自分の所有ですので維持費のみを支払うことで問題なくなります。自分の収入に応じて無理のない計画を立てることが重要です。やはり何が起こるかわからないのが人生ですので、余裕を持った計画を立てたいです。

子供の教育に対しては、どう考えてきたかというと、「魚を与えるのではなく、魚を取る方法を与える」ように考えてきました。あるとき末っ子の三男がソニーのプレステを欲しいのだけれども自分の小遣いでは足らないので不足分を出して欲しいと言ってきました。これも不足分を出してやれば、それでおしまいですが、それでは面白くないので、そのプレステの購入計画書を作成したら協力すると言いました。その購入計画書の作成の仕方については指導したように思います。まず、購入目的、購入額、その資金の調達方法等を記入した購入計画書を作成するよう指導しました。そうするとすぐ作成し直ぐ解決してしまいました。その計画書によれば兄弟で小遣いを出し合うことになり、兄二人が協力することで購入できること

となりました。これには、子供たちに一本取られた気持ちになりました。

現在はいとも簡単に、ローンが組めたりクレジットカードも簡単に作成でき、作成したらその設定がリボ払いであったりします。いとも簡単に欲しい者が手に入るようになっています。私たちの消費活動を煽っています。ついつい油断するとそれに載ってしまい。あまり必要でもない物を買ってしまいがちです。そして、余計な金利もいつの間にか支払っているような気もします。よくよく注意して消費しなければ、お金に振り回され、その為に忙しくなってしまいます。資金繰りで忙しくなるのは、なんとも悔しいではありませんか。

最後に、日本は資本主義社会です。資本主義社会はやはり資本家に有利な社会だと思います。ですので皆さんも資本家になった方が良いと思います。資本家になるためには、貯蓄をし、その貯蓄で投資をしなければなりません。稼いだお金を全て使うのではなく、必ず一部は貯蓄し投資に回す必要があります。この投資にはもちろん自分に対する投資もあります。自分に対して投資をし、無形の資産を自分自身に作るのです。無形の資産が一番強いと思います。誰にも取られることが無く税金もいりません。そこには独立し自立した自分自身がいます。

独立し自立した自己を形成するために、自分自身に投資し賢い消費者になりたいですね。そのためには、いろいろと学び考えなければならないと思います。これからも一緒に学び考えていきましょう。

本日はこのあたりで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（二〇二三年五月九日）

牧師招待チャペル

どう生きるか

医療法人聖愛会松山ベテル病院　チャプレン

佐々木　真　理

こんにちは。松山ベテル病院のチャプレン（病院付き牧師）の佐々木真理です。私の役割は、心や魂、人間関係も含めて、患者さんのトータルケアを行うことです。松山ベテル病院では、がんや神経難病など、治療が難しい病気をもつ患者さんと共に過ごしています。

さて今日は、どう生きるか、というテーマについてお話したいと思います。どう生きるかというテーマは、わたしたちの病院で、患者さんやスタッフが向き合っている切実な問題です。例えば、医師から、がんの治療が難しいことを知らされた患者さんは、残された人生をどう生きるかを考え、決断します。最後の一ヶ月をどう生きるか、最後の数日をどう生きるかを含め、基本的には本人が決定します。

どう生きるかを本人が決断できたなら何も問題がないのかというと、そうでもありません。例えば、期待通りの結果にならなかった場合に、過去の決断を後悔するということは誰にでもあると思います。後悔先に立たずという言葉がありますが、事前に熟考したとしても限界はあります。また、熟考する余裕が無かったというケースもあります。私たち人間の決断はいつも不完全なのです。それにも関わらず、いわゆる自己責任の考え方に支配されてしまうと、人生の最後のときは、人生のあらゆる決断について自分を責めてしまう、とても苦しいときとなります。

そのような私たちに、聖書はこう言います。これまでにしてきた決断が、どんなものであったとしても、あなたは責められたりしない。安心して生きなさい。人間は、安心して決断して良いのです。不完全な人間の決断を補ってくださる神さまがいるからです。

人間の決断の責任は神さまが取るので、人間は神さまに感謝しながら、安心して生きれば良い。驚くかもしれませんが、人間の誤った決断の責任さえも神さまが取ると、聖書は言います。

ルカによる福音書七章三七節に、一人の女性が登場します。聖書はこの女性を、こう紹介しています。「この町に一人の罪深い女がいた」。誰の目から見ても、この人は罪人だったということでしょう。この人は、イエス・キリストたちが食事をしている家に入ってくるなり、キリストの足元に近づき、涙を流し始めます。そして、キリストの足に口付けをし始めます。キリストはなぜか、この人の行動を止めません。

この出来事に人々がざわめく中、キリストが弟子のシモンに話を始めました。二人の借金をしている人がいて、一人はおよそ五〇〇万円、もう一人はおよそ五〇万円を借りていた。二人とも返すことができなかったので、金貸しは二人の借金を帳消しにした。ここでキリストが、シモンに問いかけます。どちらの人が、より金貸しを愛するだろうか。シモンは答えます、多く赦してもらった方だと。キリストは、こう続けます。「この人を見ないか。……この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

なんと、この人の行動は、キリストへのお礼だったのです。この人は、かつてキリストに多くの罪を赦してもらったから、こうして愛を示していたのです。

キリストは、この人にこう言います。「あなたの罪は赦された」。より詳細に言えば、「あなたの罪は、既に全て赦されている」となります。これは、うわべだけの言葉ではありません。キリストは、この人の罪を引き受けた上で、あなたの罪はもう赦されていると言っています。人間の誤った決断の結果まで全て引き受ける。これがキリストの役割なのです。そしてキリストは、「安心して行きなさい」と言って、その人を送り出しました。

キリストつまり神さまは、私が責任を持つから、あなたは安心して決断し、誠実に生きなさいと、私たちに語りかけています。

キリストの助けをありがたく受け入れ、お礼の気持ちを込めて精いっぱい生きたいと思います。私たちは、人生の最後のときまで、自由に決断し、安心して生きて大丈夫です。どうか、自分を責め続けたりしないでください。

（二〇二三年五月二三日）

分かち合う共同体を目指して

～教会こども食堂とフードバンクの取り組み～

日本キリスト教団三津教会　牧師

森　分　望

聖　書：ヤコブの手紙二章一四～一七節
讃美歌：二一－五六三「ここにわたしはいます」

私は日本基督教団三津教会の牧師、教会こども食堂代表、えひめフードバンク愛顔中予事務局の事務局代表をしています。出身は、愛媛県八幡浜です。父は牧師で、八幡浜教会で働いていました。赴任当時の初任給は三万円ぐらいだったそうです。現在の金額に直すと二二万円ぐらいになりますから、随分苦しかったと思います。その上、父は昔ながらの牧師で、教会に来られた方や困った方がいるといつも牧師館の食卓に招いていました。ですからＤＶやネグレクト、性暴力の被など様々な問題を抱えた方が一緒に生活することも多く、常に大人数で食卓を囲んでいたので、経済的に困ることもありました。それでも私が子どもの頃の生活では、本当に飢えるようなことはありませんでした。教会や地域の共同体が密で仲良く、教会や地域の共同体の中で温かく守られ、豊かに収穫したもの、美味しくできた一品を分け合って生活する生活をしてきました。

共同体とはギリシャ語で「コイノニア」と言います。「コイノニア」とは神を中心とした交わり、共有という意味があります。教会と地域の中の交わりと共有の生活。このような経験がこども食堂を始める大切な原風景です。

教会こども食堂を始めるきっかけ

私は、二〇一三年に三津教会に赴任しました。三津教会は今年で、創立一〇四周年を迎えました。教会には、今の活動を支える教会の歴史があります。一九三〇年、宣教師や牧師が協力して信徒のお宅で愛隣保育園が開設されました。当時を知る教会員は、保育園といっても保育というようなものではなかったと言います。当時、多くの人が生活の余裕がなく、子どもたちは放置されていて、お腹を空かせ、ドロドロの服を着ていました。そのような子どもたちを集めて、家に帰るま

でに手でごしごしと服や体を洗って、食事を食べさせるという大変な毎日だったそうです。教会員は保育園の職員として保育をしたり、給食を作ったりして働きました。後に関係施設として始められた老人ホームでも、介護や施設の職員として働いていたという経験を持つ方がたくさんいる教会です。

二〇一三年、教会こども食堂を始めるあるきっかけとなる事がありました。知的障がいを持っている方がトラブルに遭って首を吊って死のうとしたところ、ヒモが切れて海に落ちてしまいました。その後その方は、生活に困ってお腹がペコペコで教会に来ました。それから毎週の礼拝や聖書研究会、祈り会にも出席されるようになりました。けれども本人はいつも困った顔をされていました。いくら祈り聖書の話を聞いてもお腹がすいて仕方なかったのです。

牧師が個人的におにぎりを握ったり、カレーを用意したりして食べていましたが、この時、教会としては長い間対応ができずにいました。教会はこのままでいいのか、どんな教会でありたいかという話し合いが始まりました。聖書には「わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか」（ヤコブ二：一四）とあります。どんなに良いことを言っても、着るものがなくその日食べるものがない人のために何一つ行わないなら、信仰は何の役に立つのかと書かれています。福音とはどういうことなのか。イエスが人々に神について話された時、ただ良いことを言ったというのではなく、救いの実感や愛の体験とともに福音が訪れたのではなかったのかと思うのです。

改めて教会と教会の周りを見回してみますと、教会のすぐご近所の方の孤独死がありました。教会でも高齢者は孤独でしたし、孤食でした。シングルマザーで社会的に孤立している方もおられました。共働きの世帯でも子どもたちは孤独だったり、孤食だったり、交流がない現状がありました。二〇一三年の時点で、もうすでに子どもたちの貧困について叫ばれていました。みんながほっとする場であることを願って、六年の話し合いと試行錯誤の末、こども食堂をしようということになりました。

教会こども食堂とフードバンクの働き

さて、こども食堂はみなさんの近くにもたくさんあるのではないかと思いますが、二〇二二年一一月の時点で日本全国に七、三六三カ所のこども食堂があるそうです。子どもが一人でも行ける無料または低額な食堂で、子どもたちを見守り、地域の交流の拠点になることを目指しています。コロナ禍になり、活動休止の食堂もある中、多くの食堂が現在でも食材配布やお弁当配布など工夫して継続しています。愛媛にも九四のこども食堂があります。

私たちのこども食堂の開店は二〇一九年一月で、初めの一年は一〇〇名ぐらいの方と一緒に会堂で食卓を囲み、賑やかに過ごしていました。教会こども食堂の願いは、地域の子どもたちの健やかな成長を見守ること、さまざまな違いを超えて地域と教会がつながっていくこと、そして地域の方々がつながっていくことです。こども食堂を始める時に、教会の役員が「共に食べることは、共に生きることだ」と言いました。その言葉が今になって胸に響いています。赤ちゃんからお年寄りまで、誰でも歓迎の食堂です。

見えにくい日本の貧困

日本でも身近に貧困があると言われても、周りにそんな人はいないと思う方もいるかもしれません。教会こども食堂でも開店して一年ぐらいは、どのような方がおられるのか分かりませんでしたが、二〇二〇年のコロナ禍で困窮の現状が明らかになってきました。こども食堂にも「ずっとお米を食べていない」「子どもたちを抱えて今日、明日がどうにもならない。助けてほしい。」という声が届くようになりました。日本の貧困は見えにくい貧困と言われています。貧困と言えば、私たちはボロボロの服を着て、栄養失調のためお腹が膨れている途上国の子どもたちの貧困を想像しますが、それは絶対的貧困といって最低限の生活を維持することが困難な状況を言います。それとは別に、その国の生活水準よりも著しく困窮した状態のことを相対的貧困と言います。最近の様々な統計では日本の子どもたちの六人に一人が相対的貧困にあるとも言われています。憲法二五条には「すべての国民が健康で文化的な最低限度の生活を営む権利がある」と記されていますが、この権利が保障されているとは言えない状況に心を痛め

ています。

一方で、日本の大量の食品ロスが問題になっています。少し古い資料ですが、日本でまだ食べられるのに廃棄される食品は年間五二二万トンといわれています。これは世界の食糧支援の二倍近い量になります。教会こども食堂の食糧支援は二〇二〇年五月、感染症が広がる中、これからさらに食べられない人が増えるのではないかと考え、ご近所のお寺と共同してフードドライブを開始し、フードバンクを立ち上げることになりました。

現在、教会こども食堂のフードバンクは、多くの団体と連携し、年間二五トン以上の食糧を六〇のこども食堂や福祉施設等に届けています。様々な団体から協力が得られる要因の一つに、二〇一五年に一九三の国連加盟国により採択されたＳＤＧｓの取り組みがあります。二〇三〇年までに持続可能でより良い世界を目指すための世界共通の目標、「誰一人取り残さない社会の実現」ということに社会全体が取り組もうとしています。教会こども食堂やフードバンク活動はこのＳＤＧｓの取り組みと親和性もあり、協働して目標を目指しています。

古くて新しい聖書の価値観

新約聖書には、ペンテコステ（教会が誕生した出来事）について記されています。目の前でイエスを十字架で失って、どうにも歩み出せないでいた弟子たちがようやく歩みだした時、「信者たちは、皆、一つになって、すべての物を共有し財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて皆が分け合った。」（使徒言行録二章四三節）と記されています。今だけ自分だけよければいいと、一緒に生きることを見失った時代に子どもたちも大人も自然も、生きる者みなが苦しめられています。聖書は、この時代にもう一度みんなで生きること、分かち合って生きることを教えてくれます。そして「まず、神の国と神の義を求めなさい」と書かれています。〝神の義〟とは、時代によって変わりゆく価値観とは違った永遠に変わらない神の価値観であるといえます。例えば私たち人間の価値観というものは時代によって大きく左右されます。「万歳万歳」と戦争で死ぬことが〝良い〟とされたり、二四時間働く猛烈社員が〝良い〟とさ

れたり、現在でしたら、何も考えずひたすら従順であることを〝良い〟とされるのかもしれません。このように時代や人間の都合によって良くなったり、価値のないものにされたりすることのない、変わらないもののように〝神の義〟すなわち、どんな時も神は、一人一人を愛してくださっている。罪のないものを十字架に架けるような人間の弱さと罪を味わってなお、あなたが大事、あなたは私の目に価高く尊いと言って愛し抜いてくださる神の愛によって、喜び尊び合いながら生きるように聖書は勧めています。

さて、讃美歌（一九五四年版）四五四番に「うるわしき朝も」という讃美歌があります。この讃美歌を三津教会のお年寄りはとても愛していいます。「うるわしき朝も　静かなる夜も　食べもの着物を　くださる神さま」。初めにこの歌詞を聴いた時は、なんてシビアな讃美歌なのだろうと思いましたが、今は、これが戦前戦後の苦しい時代を生き、子どもたちのために働いてきた教会の方々の実感だったのだろうと感じています。いのちと尊厳が大切にされ、守られ、温かいイエスの愛・神の義によって歩んで行きたいと願っています。

（二〇二三年六月二〇日）

後学期始業チャペル

大きいことはいいこと？ 小さなオルガンの話

日本キリスト教団松山教会　牧師／
女子大学・短期大学非常勤講師

上島一高

詩編一四七：四―一一

この間の東京五輪のその前の東京オリンピックの数年後、よく流れたのが山本直純作曲の森永エールチョコレートのCM「♪大きいことはいいことだ」でした。「山本直純？　誰？」と思われるかもしれません。ただ、「ぞうさん」等で知られる詩人・まどみちおさんの詩に載せて作曲された「♪一年生になったら（一年生になったら、友だち百人できるかな）」を書いた人です。

と言って分からなければ、「♪こぶたぬきつねこ」はどうですか。「こぶた　たぬき　きつね　ねこ（繰り返し）　ぶぶぶ　ぽんぽこぽん　こんこん　にゃお（繰り返し）」ってあれですね。こちらは、作詞作曲共に山本直純さんです。そんな彼が、今から五六年前の一九六七年に作曲したのが「♪大きいことはいいことだ」なのです。こんな歌です。

大きいことはいいことだ（ミ・レドミ）／おいしいことはいいことだ（ミ・レドレ）
森永エールチョコレート
おおきくたべて　おいしくたべて／50円とはいいことだ（50円！）／
森永エールチョコレート

高度経済成長の真っ只中、「大きいことはいいことだ」は時代の心をつかみました。それまでの「小さな幸せ、慎ましやかな幸せという美徳」から、「もっとのびのびと胸を張って、大きいことはいいことだと主張しよう」ということだったそうです。時代的意義はあったのかも知れません。ただ、一九九〇年代から縮み始める中で「小さいほうがいい」とは言わないまでも「小さいこと」が見直されてきています。

◆さて、実は、私が所属している松山教会には市内でも有数のパイプオルガンがあります。それはオルガンとしては大きい方とは言えませんが、そ

れでも一般的に目にするオルガンよりはずいぶん大きく、響きは艶やかでとても美しいもので、毎週の礼拝の賛美を支えています。礼拝堂にはこの他、電子オルガンがあり、ピアノもあって、用途に合わせて利用しています。

そこに、三年程前、小さなリードオルガンがやって来ました。ピアニカを大きくしたものと思ってくださるい。そちらは口で風を送って、リード（弁）を振るわせて鳴らすのですが、リードオルガンの方は、足踏みで風を送ります。別室には大きなリードオルガンもあるのですが、こちらは白鍵黒鍵合わせて三九鍵しかないベビーオルガンです。日頃パイプオルガンが響き渡る礼拝堂で務めを果たせるのでしょうか。

固唾を呑んで、ベビーオルガンの鳴るのを待ち受けていると、小さな体からは、期待通り、芯の通った美しい音色、繊細で思わず聴き入ってしまう音色が奏でられたのです。それは、複雑な作りの立派なリードオルガンからは失われた響きでした。実は、私は、このような小型リードオルガンの「鳴り」をすでに知っていました。だから「期待通り」と言ったのです。

◆最初の体験は、私の新潟教会時代、「神の息に与る夕べ」と題して、お隣の富山県の教会オルガニスト・松原葉子さんを招いたコンサートでのこと。当初、新潟教会の中型リードオルガンを使用するところでしたが、下見に来られて、試奏された上で、御自分の日頃弾いている小型リードオルガン、音色は一種類しかありません。期待していなかったのに、葉子さんが弾き始めると、音が立ち上がりました。

それが、演奏会当日集まった人々の心を捉えたのは言うまでもありません。もっとも、新潟教会の礼拝堂はさほど広くありません。その後、ホテルの大きな宴会場を会場に、四国の教会が集まって会議をした際の開会礼拝で、葉子さんのオルガンよりさらに一回り小さい、文字通りベビーオルガンが現れたのです。そして、皆の心配をよそに、とても立派に役割を果たしてくれたのでした。

それは、当日弾いてくれたオルガニストの私物でした。それが、その数年後、松山教会にやってくるとは、その時思いもよらぬことでした。でも、私は、これらの経験を元に、小さなオルガンに対する心からの尊敬の念を持った次第です。今

でも、礼拝後には奏楽者に感謝を伝えるのですが、ベビーオルガンには、まるでそれ自身が人格を持っているかのように、「ありがとうございました」と言います。

◆ところで、私なんぞは、小さいオルガンだから、とにかく思いっきりペダルを足踏みして、より強い風を送らねばと考え、実際そうしてしまいます。しかし、オルガンをくださった中村証二さん（元・四国学院大学職員）は言います。「リードオルガンは大きい音を鳴らせばいいというものではありません。抑えた足踏みでリードに風を通してあげると良い音が出るのです」。果たして、その通りでした。

今日は、その小さなオルガンを連れて来ていました。短い時間に、誰かの手を煩わすのも、と思いましたので、皆さんのお耳汚しになるのを恐れつつ、私の拙い演奏で恥ずかしいのですが、ベビーオルガンの可能性のほんの一端を感じ取っていただきたいと思います。以下に紹介するのは、季節的にはちょっと早いのですが、クリスマスの賛美歌から「♪まきびとひつじを」。

今日の聖書で、預言者は言います。**「主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく／人の足の速さを望まれるのでもない。」**人間は、周りに気に入られよう、周りを出し抜こうと、勇ましさや速さを求めがちです、しかし、主なる神は、それらを求めないというのです。そもそも「主は貧しい人々を励まし／（そのような主に）逆ら（い、貧しい人々を虐げる）者を地に倒される」、そんな主だからです。

逆に言えば、主なる神もまた、個々の人間に、何か圧倒的、また、絶対的な知識や力を与えられません。そのようなものにただ頼って独りで、隣人を支配して生きるのではなく、むしろ、欠けがある者同士、不十分な者同士が、繋がり合って生きることを求められるからです。聖書を生きた人々は、少なくとも、そういう存在として主なる神を思い描き、神と自らの関係を確認して来たのでした。

◆さて、この小さなオルガンは、歴史を証言します。人々の様々な営みを支え、また、その働きを見て来たのです。ほんの少し、紹介しておきましょう。

誕生は一九三六（昭和一一）年。リードは

Harmola銘（ドイツ製）。日本最古の楽器店・三木楽器がカワイの工場で出来た物を自社製として販売しました。このオルガンの最初の所有者は橋本亘。日本基督改革派教会牧師で、日本キリスト改革派教会高知旭教会で勤めました。街角での伝道にも用いられます。その息子・牧夫氏は四国学院大学で教え、学長も担いましたが、研究室にオルガンを保管していました。

一九八〇年代の終わり頃、研究室から同大学宗教センターへ移され、職員の中村証二さんに委ねられました。工房和久井（和久井輝夫氏）によって修復の後、四国内外の教会や学校、会館で演奏に使用されました。そして、松山教会に寄贈され、現在、松山教会の礼拝堂で、主に夕べの礼拝に用いられています。一九三六年生まれなので八七歳。来年、米寿八八歳を迎えるが、いよいよ元気です。

◆ところで、大切な務めをやり遂げるべく、イエスと弟子たちは都エルサレムに向かいます。都に入るに当たり、イエスを運ぶ役割が、立派な馬とかではなく、驢馬、しかも、子驢馬に任せられたことはよく知られているところです。**「主は馬の勇ましさを喜ばれるのでもなく／人の足の速さを望まれるのでもない」**と言われていた通りです。

しかも、子驢馬で入城したイエスは、武器も取らず、捕らえられ、十字架上に命を終えました。ところが、その後、人々の心の中に繰り返し思い起こされたのは、イエスを抹殺した強い力ではなく、彼らによって抹殺されたイエスが隣人と生きた愛の方でした。今もイエスは、優しい足踏みで私たち「小さなオルガン」に神からの風を送り、私たちの体に美しい音色を奏でさせてくれるのです。

蛇足ながら、山本直純のお父さん・山本直忠もやはり作曲家・指揮者で、直純さんが一八歳になる一九五〇年にカトリック教会で洗礼を受け、六〇歳で亡くなるまで一五年間、カトリックの南山大学で教え、キリスト教音楽を作曲し、聖イグナチオ教会でオルガンを弾いた人。洗礼は直純さんが自立して後のことですが、直純さん自身、晩年、やはりカトリック教会で洗礼を受けています。

（二〇二三年一〇月三日）

二宮邦次郎先生と今治の企業家活動

――海事産業やタオル産業に残る軌跡

短期大学現代ビジネス学科　教員

西　岡　久　継

今回のチャペルアワーは、「二宮邦次郎先生と今治の企業家活動」というタイトルでお話をさせていただこうと思います。

私は、この四月に本学に赴任する前は、松山短期大学で教員をしていました。私の専門は経営学ということもあり、松山短大で教鞭をとり始めた頃から、地元を代表する今治の造船や海運といった海事産業を研究テーマにしています。研究の途上、今治の海事産業誕生のきっかけの一つに「今治教会を中心とするキリスト教会のネットワーク」があるということを知りました。しかし、これについては、それ以上深堀する機会にも恵まれず、とりあえず手付かずになっていました。ところが昨年十二月に本学への採用が決まったことがきっかけとなり、これを調査する機会を得ました。ホームページで本学の歴史を読んでいた折、本学の創設者である二宮邦次郎先生が今治教会にいらっしゃったという記述を見つけました。いくつかの今治海事産業関連の資料で「今治教会の二宮牧師」「二宮牧師から洗礼を受けて」という記述があったことを思い出して、早速調べてみましたら、同一人物だということがわかりました。点と点がつながって、二宮先生と今治の企業家たちのつながり、二宮先生が布教された「隣人愛」の精神が今治産業の勃興に繋がっているのではないかということが、おぼろげながら理解できました。そして、そこに本学の歴史も垣間見えることもわかりました。まだ完全なものではありませんが、今日はわかっている範囲でお話をできればと思います。

本題に入る前に、愛媛へのキリスト教の布教の話をしておいた方が、二宮先生について理解しやすいと思います。皆さんご存じのとおり、江戸時代、キリスト教は禁制でしたが明治六年に解禁されます。愛媛への布教はカトリックよりもプロテスタントの方が早く明治九年のことです。神戸教会牧師のアッキンソン氏が、松山在住の方からの布教依頼で三津浜に来ました。しかし依頼者はキ

リスト教信仰に反対する一族の妨害で軟禁され、アッキンソン氏の出迎えにも来られず、挙句の果てに三津浜で僧侶や神主による妨害も受け、布教は困難をきわめました。しかし、三津浜を離れ、松山市内に移ると市内在住のキリスト教信者がおり、その斡旋で説教会場が確保でき、当時の県知事による安全の確保と協力によって、一五日間ほぼ毎日説教を行うことができました。その中で、アッキンソン氏にとっての大きな収穫は、今治商人増田精平氏との出会いでした。増田氏はアッキンソン氏の説教に耳を傾け感化され、彼を今治へと招きます。

今治での布教は松山よりも好評で、説教は超満員でした。四日間で約二、五〇〇人が説教を聞いたといわれており、その後も毎年アッキンソン氏の今治布教は続き、明治一二年には四国初のプロテスタント教会として今治教会が設立されました。町人の方が主体で立ち上げた勤勉で禁欲的な性格の教会でした。初代牧師には、同志社創設者である新島襄氏の推薦で横井時雄氏が就任します。横井牧師は幕末の有名な儒学者横井小楠の息子で当時の先端知識を持った知識人でした。この横井牧師のもとに、明治一五年二宮邦次郎先生は伝道師として着任するのです。

ここで二宮先生の経歴について少しお話ししますと、先生は一八六〇年に岡山県高梁市にお生まれになっています。自由民権運動に関わりながら小学校教員をしておりましたが、一八八〇年に新島襄氏との出会いがあり、新島氏から二〇歳で洗礼を受け、同志社に学び伝道者となります。新島氏は当時、先進的な考えの持ち主で「女子教育の重要性」を訴えていました。日本の近代化は富国強兵ではなく人からだと主張し、自由の心を持って見識と愛情を持った女性が育っていないところに、この国の深刻な問題があり、教育、なかでも女性が抑圧されてきたこの国では、女子教育を充実させることが必要」だと説きました。新島氏を師として、同志社での学びを終えた二宮先生は、明治一五年高梁教会の設立に尽力した後、岡山の美作落合教会二代目牧師、そして、明治一五年今治教会に伝道師として着任したのです。

今治教会に着任した二宮先生は横井牧師とともに愛媛県内で精力的に伝道を行い、明治一八年松山第一基督教会を創設し牧師に就任しました。基

盤の弱い松山教会を今治教会が財政的にも支えました。そのような中で、二宮先生は新島氏の教えを受け継ぎ、明治一九年九月一六日「私立松山女学校」を開設します。これが本学の開学です。また、この時、今治商人増田精平氏の姪にあたる増田シズ先生が松山女学校初代教員となっています。本学と今治との縁を感じます。

前置きが長くなりましたが、ここからが本題です。話の舞台は明治、大正、昭和の今治市、特に波止浜です。現在の波止浜は造船所団地で有名ですが、かつては瀬戸内有数の塩田であったことをご存じの方は少ないと思います。

波止浜に八木亀三郎氏（一八六三―一九三四年（文久三年―昭和九年））という一人の企業家がおりました。今日の本題の主人公です。江戸時代から波止浜は塩田で財を成し浜旦那と呼ばれる塩田地主がいましたが、彼もその一人でした。当初は塩田経営と塩の輸送・販売で成功し、続いて、ロシアでの鮭漁業と塩蔵鮭の輸入で大成功します。その後、彼は蟹、鮭鱒工船の先駆者となり、その事業は現在のマルハニチロや日本水産へと受け継がれていきます。波止浜村長、愛媛県議会議員、予讃線開設事業といった公務にもかかわり、後に新来島どっくになる波止浜船渠の設立メンバー、四国ガスの前身である今治瓦斯の初代社長、伊予銀行の前身となる今治商業銀行の頭取になっています。彼の家業である八木本店は後継者の息子も先に亡くなり、亀三郎氏死後解散、八木家も断絶していますが、現在の愛媛経済界をリードする企業の設立に関わっていた方です。

実は、この亀三郎氏は明治二〇年に二宮先生から洗礼を受けた敬虔なキリスト教徒でした。亀三郎氏の信仰心の厚さは、妻、子供、母親も洗礼を受けていたことや明治二一年に亀三郎氏の寄進で波止浜教会が設立されたことからも理解できます。また、亀三郎氏の娘の房廼氏は、当時の松山女学校で学び、英語が堪能で海外との貿易業務を行っていた八木商店へ訪れる外国人の通訳も行っていたという記録も残っています。当時の東雲の英語教育のレベルの高さが垣間見える逸話です。また、本学一〇〇周年記念誌の寄付者リストにも亀三郎氏の名前を見ることもでき、当時の二宮先生との密な繋がりも見えてきます。

先ほども申し上げましたが、亀三郎氏は日本の

蟹工船の先駆者でした。蟹工船と聞くと皆さんあまり良い印象を持たないのではないでしょうか。おそらくプロレタリア文学の代表作である小林多喜二の『蟹工船』をイメージして、蟹工船の貧しい出稼ぎ労働者に対する酷い酷使と、漁業振興策の立場から労働者の酷使を見て見ぬふりの政府の姿を思い描かれる方も多いと思います。しかし、亀三郎氏の蟹工船は小林多喜二の世界とは随分違うのです。船員の健康状態は大変良く、蟹工船で流行っていた脚気も出ておらず、当時の函館新聞に優良船として紹介された記事も残っています。労働者の酷使はなく、給与も高く、船内は民主的で、船員から亀三郎氏の息子實通氏への礼状なども数多く現存しています。私も当初この事実に触れた際は、亀三郎氏親子はよほどの人格者であったのだろうと思ったのですが、彼の信仰の厚さを考えると別の見方もできるのです。それを理解していただくためにもう一つ別の逸話を紹介しましょう。

亀三郎氏は今治商業銀行の頭取をしていたことは既にお話ししました。昭和二年、金融恐慌で今治商業銀行は取り付け騒ぎを起こし休業に追い込まれます。時の政府や愛媛県、日本銀行は、営業再開へ向け重役陣に私財提供の要請を行います。この私財提供に応じることがきっかけとなり、日銀支援が実行され、多くの銀行が倒産する中で、銀行は存続することができました。重役全員の私財提供は現在価値に換算すると約三〇億円程度であったといわれています。亀三郎氏の提供額は現在価値で五億四千万円程度、その他にも重役の中には、おそらく今治教会の信徒ではないかと思われる柳瀬存氏、柳瀬栄十郎氏といった名前もありました。巨額の私財提供ですので、提供せず倒産を選択することもできたはずですが、地域の繁栄のために彼らは身銭を切るのです。

蟹工船、今治商業銀行の逸話を見て、それは美談や人格者ということではなく、亀三郎氏や息子實通氏、他の重役の方々は、キリスト教の「隣人愛」の精神をもっていたからではないかと私は思いました。二宮先生の洗礼を受け、敬虔なキリスト教徒となった企業家たちの「隣人愛」がそこにあったのではないかと、そう考えると彼らの行動の根拠は非常に理解しやすくなり納得もできるのです。

今回は時間がないので全てをお話しすることはできませんが、今治タオルにも同様に今治教会の軌跡が残っています。明治期に白木綿が衰退し、今治の地域経済も衰退していましたが、今治教会信徒の矢野七三郎氏が綿ネルを導入し、今治綿業は復活します。大阪で紀州ネルが流行していると いう情報は今治教会の牧師（横井牧師ではないかと思われる）の方から得たという記録もあります。矢野氏は当初ネル生産で失敗し、彼の会社はつぶれかけますが、彼は地域の人々を豊かにしたいという隣人愛に駆り立てられて働いたといわれています。彼のネルは、伊予ネルと呼ばれ、その後の今治タオル発展の道筋を切り開きます。

矢野氏は明治二二年何者かの凶刃に倒れ三五歳の生涯を閉じますが、彼の仕事は柳瀬義富氏の興業舎が引き継ぎました。本格的にタオル製造を始めた阿部平助氏、高速タオル織機を開発した麓常三郎氏、染色技術を開発した中村忠左衛門氏はすべて今治教会の信徒でした。八木亀三郎氏の残した事業である波止浜船渠を引き継いだ石崎金久氏も、今治瓦斯や四国ガスの初期の社長も今治教会信徒でした。

今日は、今治の企業家を中心にお話ししましたが、アッキンソン氏、横井牧師、二宮先生の布教した隣人愛と一般信徒の結びつきを重視するキリスト教の教えが、今治の近代化を推し進めた原動力の一つだったといえるのではないでしょうか。

今治教会の信徒の方たちは町人を中心に絆を深め、隣人愛、節約、勤勉という職業倫理に生きたといえます。まさしく偉大な社会学者マックス・ウエーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の今治版ともいえる活動がそこにあったといえます。

現代のジャニーズ、ビッグモーターの問題を考えるに、企業家の信条の大切さ、正しい倫理観をもつことの必要が感じられます。偉大な企業家は皆、一本筋の通った職業倫理や宗教観を持っています。

今治の一部の企業家にとっての信条、それはキリスト教の「隣人愛」であったのではないでしょうか。その初期のキリスト教布教において活躍したのが二宮邦次郎先生だったといえるでしょう。そして、そこにわたしたち東雲の伝統も深く関わっているといえるのではないでしょうか。

（二〇二三年一〇月一〇日）

平和のシンボル

日本ホーリネス教団広島福音教会　牧師

加藤　望

実に、キリストはわたしたちの平和であります。

エフェソの信徒への手紙二章一四節前半

只今紹介に与りました加藤望と申します。東雲女子短期大学チャペルにお招きいただき光栄に存じます。今日、司会をしておられる加納章先生との繋がりで、こちらに招いていただきました。加納先生は、広島にあります私の教会と同じ公益法人の子ども園で、五年間、園長をしておられ、そのときから親しくさせていただいていました。

また、私の所属する教団内にも四国出身の方が多くいますので、もしかして東雲女子短期大学卒業生もいるのではないかと調べたところ、なんと私の恩師の奥さまが卒業生でいらっしゃいました。ミュージック・メジャーで、いつも綺麗な声で独唱をしておられた先生です。もう天にお帰りになられましたが、お世話になった方です。不思議な縁を感じますね。

さて、今朝は「平和のシンボル」と題してお話ししますが、皆さんは、平和のシンボルと聞かれて、何を連想されるでしょうか。

一　平和のシンボル：鳩

多くの人は「鳩」を思い浮かべるのではないでしょうか。スポーツの祭典オリンピックの開会式で、必ず白い鳩が放たれますね。オリンピックは平和の祭典でもあります。平和を祈り願う広島の原爆記念式典でも、必ず白い鳩が放たれます。役目を終えると必ず自分の巣に戻る伝書鳩です。鳩が、白い鳩が、平和の象徴・シンボルとして世界中の人々に受け入れられている証拠でしょう。

けれども、なぜ鳩が平和の象徴として認められたのでしょうか。穏やかな性格ですし、鳩のつがいは仲良くて、くちばしを重ねている姿をよく見かけますから、それが理由で平和のシンボルとされたのでしょうか。もちろん、それも一つの理由でしょう。

実は、鳩が平和のシンボルとして選ばれた出処は、旧約聖書・創世記に出て来る「ノアの方舟物

語」の一節なのです。大洪水の水が引いたかどうか調べるために、ノアは方舟から鳩を放しました。二回目に飛ばしたときに、鳩はオリーブの若葉をくわえて戻ってきたのです（創世記八章）。それでノアは地上から水が引いたこと、すなわち神の裁きの洪水が引いたことを悟りました。こうして創造主なる神と被造物の代表である人との間に平和が実現しました。国連のビルにも、ノアが放った鳩を描いた「平和の鳩」のモザイク画が掲げられています。中世に描かれた絵の複製で、一九七九年に時の法王ヨハネ・パウロ二世から寄贈されたものです。平和の音信を知らせてくれた一羽の鳩。正に平和のシンボルそのものです。

二　平和のシンボル：十字架

キリスト教のシンボルと言えば、その一つに「十字架」が挙げられるでしょう。「キリストはわたしたちの平和」と先ほど読まれた聖書にもありましたね。その後に続く説明で、キリストが十字架にご自身の命をささげられたことによって、「敵意」という隔ての壁を打ち壊し、ユダヤ人（神に選ばれたという選民意識）と異邦人（ユダヤ人から差別）をひとつにして平和を実現されたことが記されています。神との平和（十字架の縦棒）、人との平和（十字架の横棒）が十字架によって実現したのです。キリストは平和の君、平和そのものなのです。

ところで、十字架は元来、ローマ帝国に反逆した重罪人を処刑する死刑の道具でした。その上に神の御子キリストがかけられたことで、人類の反逆と罪に対する神の怒りと裁きが彼の上に注がれ、神の救い（神との平和）が人間に与えられることとなったのです。こうして、忌み嫌うべき死刑の道具・十字架が、平和のシンボルへと変えられました。今や世界中の教会に十字架が掲げられていますし、ファッション・アイテムとしてネックレスになり、多くの人が身に着けるようになっています。

三　平和のシンボル：原爆ドーム

私は広島から来ましたので、最後に、広島ならではの平和のシンボルについてお話ししましょう。それは原爆ドームです。一九九六年に世界遺産に登録され、今や広島のみならず、世界の平和のシンボルとなりました。時代を越えて、核兵器の惨禍、その廃絶と世界の恒久平和の大切さを訴

え続ける人類共通の平和記念碑として認められたのです。

そもそも、なぜ広島にドームという西洋的建造物があったのでしょうか。その歴史を紐解いてみましょう。

このドームは、一九一五年（大正四年）、チェコ人建築家ヤン・レツルが設計したものです。大胆なヨーロッパ風モダン建築として、その中心にドームを据えた建物が「広島県物産陳列館」として建てられたのです。ドームを中心にその両脇と前に三～四階建てのビルが配されていました。一九三三年（昭和八年）には「広島県産業奨励館」と改称され、多くの軍需品も陳列されたそうです。広島にとって、経済と文化発展の象徴的な建物、それが産業奨励館だったのです。

ところで西洋風モダン建築様式として採用された「ドーム」とは、本来、東方教会と呼ばれるギリシア正教等の大聖堂の中心的建造物です。ドームの吹き抜けの丸い天井の下で、修道士たちがチャントの歌声と祈りを、ドームの上におられる神に届くように響かせたのです。「ドーム」とは英語やフランス語「Dominion」（主権、偉大な支配の意）から生まれた言葉です。またラテン語「Dominus」（主人、支配者）との繋がりもあります。「紀元後」を現わす「A.D.」は「主の年（Anno Domini）」の略号です。正に「ドーム」は神の主権と偉大な支配を象徴する建造物なのです。

一九四五年八月六日午前八時一五分、産業奨励館から僅か一六〇m離れた上空六〇〇mで、人類最初の原子爆弾が炸裂しました。鉛で覆われたドームの屋根は溶け落ち、囲むように建っていたビルは倒壊。ドームは骨格だけが、無残に焼けただれて残りました。正に、神のDominion、偉大な主権と御支配が、愚かな人間が生み出した悪魔の兵器・原子爆弾によって、傷つけられ、破壊されつつも残ったのです！

当時、アメリカだけではありません。日本もドイツも我先にと原子爆弾開発を進めていました。アメリカのマンハッタン計画で最初に造られた原子爆弾は、皮肉にも「Trinity」と名付けられました。三位一体の神です。Almighty の意味に使

われたのでしょうか。何という冒涜でしょう。恐ろしい大量殺りく兵器に神の名を冠したのです。人類の罪の極みです。

原爆ドーム、それは傷ついた神の主権と支配の象徴。同時にそれは、神が自ら痛みを負って実現された平和の象徴でもあります。これは正に、傷ついたキリストがかけられた十字架にも重なる「平和のシンボル」ではないでしょうか。「十字架」とともに「原爆ドーム」も、私たちキリスト者は「平和のシンボル」として心に刻み、世界の人々に語り伝えていきたいと願います。

（二〇二三年一〇月一七日）

松山東雲学園創立記念フォーラム

独りから二人へ

日本キリスト教団松山教会　牧師／
女子大学・短期大学非常勤講師

上　島　一　高

創世記二：一五―二三

創世記一章では、「男と女に（彼らを）創造された」と言われます。二章では、「彼に合う助ける者」として「女を造り上げげられた」、それも、「人（アダム）から抜き取ったあばら骨で」と物語られています。ただ、これは、男から女を造ったというよりは人間を男と女とに分化させたということ。

今日的には、光がプリズムによって七色のグラデーションに分光するように、多様な性スペクトラムに分化させたと言いうるでしょう。そして、互いに協力しつつ、神が「神のかたち」の人間に託された働きを果たすよう整えられたということになります。

ところが、人間同士、男女間が、協力関係ではなく支配的な関係であると、どうなるでしょう。わたしは、その一つが、神が地上の生き物を拭い去ろうとした洪水（ノアの箱舟）の物語であり、その果てがバベルの塔の物語なのだと思います。こちらは、人が人を従えつつ、神の領域を侵してバベルの大塔を造ってしまったのを神が人の言葉をバラバラにして止められた物語です。

強い者が支配する人間のあり様は、「神のかたち」である者同士としてコミュニケーションできるはずの人間を、個々バラバラに「非人間（＝モノ）化」して管理する方法であり、今日に至るまで男たちが、女性に対し、生き物や自然に対してやってきたことです。

◆松山女学校＝東雲の創立はこれらに抗するものです。初代校長・二宮邦次郎の遺稿「女子教育論」（妹尾頴一元校長の『学園百年史話』一九八五所載）から紹介しましょう。以下は二宮の肉声です。「教育とは人をして人たらしめるものである。……実に人は、自己を知ると言ふことが誠に大切であります。この自己を知れと言ふ事は、即ち人とは何ぞやと言ふの問題にして、人間はこの地上

に在りて宇宙万物とは如何なる関係を有し、如何なる位置に立つ者なるか……を知りて初めて真正の人間となり得べきなり。」今日の箇所とつながります。

　以上、二宮は「人間とは何者か」を問うた後、「女とはなんぞや」という問いに進みます。「女自身に於てこの問題の解釈を持たねばな（らない）が、……女が自己を発見したのは、漸くこの世紀の事である」とし、「開闢以来幾千万年、女は全く自己を知らず、人は只男子のみの如く、人として見られず」に来たことを直視しています。

　二宮は「神其像の如く［＝神のかたち］に人を創造し給へり」（創一：二七）を取り上げ、さらに、今日の箇所を説き明かしてきます（引用省略）。これに、先の妹尾顕一さんは、こうコメントします。「女性独特の技芸を身につけさせることが女子教育なのではなく、まず、女性自身が、女性である前に人間として価値ある存在である事実に開眼して、人間の尊厳の認識と自覚を持つことができる人に教育するのが女子教育なのだ、と（二宮邦次郎は）述べている……が未定稿（に終わっている）」と。

◆米国でも女性に高等教育の道が開かれるのは一九世紀前半。女性宣教師はそれを移入し、彼女ら自身がロールモデルとなります。ただ、二宮の遺稿では、女子教育はこうであるというより、何でないのかが示されています。これが二宮の遺稿が未定稿に終わっている理由かもしれません（が、それ自身大きな問いかけです）。曰く、男中心社会を良妻賢母として補完するだけであってはならず、いわんや娼婦として奉仕させられてはならない。

　男性中心の社会が「人間とは何ぞや」に十分答えられないどころか、「人間である」ことを証明できない中で、女性の世紀の東雲（＝夜明け）が到来し、多くの、名を成した女性、名も無い女性が、男社会を揺さぶってきました。今も、様々な問いかけを生み出しています。女子教育はこうして、女性が人としての尊厳を獲得させる教育であるばかりでなく、男を変える教育でもあったのです。

（二〇二三年一〇月三一日）

ウミガメのスープ

女子大学心理福祉専攻　教員
中川　祐治

皆さんは、『ウミガメのスープ』という本をご存知でしょうか。水平思考推理ゲームと言われ、問題を側面から考える方法を訓練するゲームです。

「男がレストランに入り、メニューから「ウミガメのスープ」を頼んだ。それを一口食べた彼はレストランを飛び出し、持っていた拳銃で自殺してしまった。

なぜだろう？」

ゲームのやり方は至って簡単で、一人が問題を出し、数名の解答者が出題者に質問をしますが、出題者はその質問に対して「はい」「いいえ」「関係ありません」としか答えません。解答者はその返事を元に、次々と推理を行い、正解にたどりつきます。

八〇問ほどある問題の中で一番難しいのがウミガメのスープで、それはこのような問題です。

この問題を解くには、普段私たちが行っている論理的な思考、これを垂直思考と呼びますが、水平思考という別の考え方もあります。例えば「手元に一三個のリンゴがあります。これを四人の子どもに平等に分け与えるにはどうしますか？」という問題があります。垂直思考では「一人三個ずつ配り、余った一個を四等分する」となりますが、水平思考では「リンゴジュースにして配る」となります。

このように水平思考では、

- 視点を変えて問題解決のアイデアを考える。
- 常識・前提条件にとらわれない。
- 論理よりも直感を重視
- 横に広い視点を持って考える。

ということが重要です。

さて、先程のウミガメのスープの続きですが、これを聞いた解答者は、

「ウミガメのスープに入っていたのは、本当にウミガメの肉だった？」と聞き、

出題者は**「はい」**と答え、さらに解答者は

「ウミガメのスープには毒か何かが入っていた？」と聞き、

出題者は「いいえ」

解答者は「**男はレストランに入る直前に何かをした？**」

出題者は「**関係ありません。**」

と言うように答えます。

ところで皆さんは、内村鑑三をご存知でしょうか。

内村鑑三（一八六一―一九三〇）は、日本のキリスト教思想家・文学者・伝道者・聖書学者です。彼の著書に『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』があります。この本は最初英語で書かれ、のちに日本語に翻訳されているのですが、英語のタイトルは〝How I Became A Christian〟です。冒頭は Why ではなく How です。つまり、どのようにしてクリスチャンになったのかが書かれています。

内村鑑三が生きていれば、ウミガメのスープのように彼に質問してクリスチャンになった経緯を直接知ることができるでしょうが、我々は彼の著書からそれを知ることができます。

今日の私の話のタイトルは、先程の内村鑑三の著書と同じにしようかと思っていたのですが、畏れ多いのでやめておき、水平思考の話としました。

これから先は、私がどのようにしてクリスチャンになったのかをお話ししますので、皆さんは水平思考で推理してみてください。

私は一九五七年一二月一四日、父中川美代（よししろ）（当時五三歳）と母智恵子（ちえこ）（当時三六歳）の長男として東京都国立市で誕生しました。歳の差一七年の夫婦です。

Q）私には兄がいますが、なぜか私は長男です。なぜでしょう？

その後小学校三年まで千葉県白井町（現在は白井市）で、高校卒業まで千葉県船橋市で過ごしました。私が高校二年の冬にそれまで長い間病気だった父が亡くなりました。父が最後に使っていた手帳には

「偽りの涙など無用にて候
葬式など無用にて候
神仏など無用にて候」

と書かれていました。こんなに辛いことばかり身の回りに起こるのは神や仏など存在しない証拠だとこの時確信し、さらにニーチェやサルトルの

著書を読みあさり、ますます無神論へと傾倒して行きました。

そのような生活をしている中、初めてキリスト教と出会うことになりました。それは、修士論文で行った実験のデータ解析の補助として雇ったクリスチャンの大学生を通してでした。無神論に染まっていた私は、神の存在を全く認めなかったので、神やキリストの話を聞く度に反論し、議論すれば論破できるという自信を持っていました。アルバイトの学生とは何度かキリスト教について議論をしましたが、この時に相手の手の内を知ろうという思いで、中学の頃にギデオン協会から頂いた新訳聖書を読みあさり、これが聖書を最初に知るきっかけとなりました。

その後、東京都立大学の博士課程に進み筑波研究学園都市に住み、高エネルギー物理学研究所で研究を開始することになりました。筑波研究学園都市は人工的に作られた街で、筑波大学を中心として国や企業の研究施設が立ち並び、未来都市の様相を呈しています。しかし、当時「筑波病」と呼ばれる自殺症候群によって何人もの人がビルから飛び降りたり、首を吊ったりして死んでいました。

その頃の自分は研究に没頭し、筑波病などとは無縁だと思っていました。しかし、研究を開始して半年足らずで一つの成果を上げたのですが、その後心にぽっかりと大きな穴が開いたように感じ、精神的に不安定な状態になってしまい、たえず自殺することばかり考えるようになりました。

その年の一二月には研究も全く手につかなくなり、東京都内を目的もなく歩き回っていたという記憶しか残っていません。まさに生と死の境を歩いていたようで、いつ死んでもおかしくないような状態でした。

ところで、皆さんの頭の中は、先程のウミガメのスープの話で悶々としていることと思いますので、私の話に集中できるように正解をお話ししましょう。

「男は何年か前に、家族や数人の仲間と共に海で遭難し、餓死寸前になるまで漂流したことがありました。彼がレストランでウミガメのスープを頼んだのは、漂流中に食べたウミガメのスープの味が忘れられなかったからです。

しかし、男はスープを口にした瞬間、自分が、

今初めて本物のウミガメのスープを食べていることを知りました。かつて口にしたウミガメのスープとは、味が全く違っていたのです。

そして彼は気がつきました。漂流中にウミガメのスープと言われて食べた肉は、実は漂流中に衰弱死した自分の息子のものだったことに。」

さて、私の話に戻ります。ギデオン協会からはそれまでに三冊の新約聖書をいただいており、三冊を並べて読み進めて行くうちに、四つの福音書にキリストに関する同じ内容と思われる記事が、異なる著者によって記されていることに気がつきました。それまではキリストが行った奇蹟は一種の例えや暗号のようなもので、それが本当に起こったことだとは考えてもいませんでした。しかし、四つの福音書からその証拠をつきつけられ、キリストが行った奇蹟、特に死んで復活したということが本当だとするならば神の存在を認めることになり、無神論の私は何とかして神の存在を否定しようと苦しむばかりでした。

Q）なぜ、聖書を読んだのでしょう?

そして年が明け、大阪で開催される研究会で発表するために、このような状態にある中で何とか最低限の準備を済ませたのですが、大阪への出発の二日前にカキにあたり高熱・吐き気・下痢に見舞われ医者から入院するように言われました。しかし、もう死んでも構わないという気持ちで、大阪へと出発しました。

大阪では熱と下痢の悪夢のような四日間で、何も食べられずポカリスエットで水分を補給するだけで過ごしましたが、不思議と体は癒され無事に生きて帰ってくることができました。そしてその翌日、千葉の実家で寝ていた時の明け方、夢の中で「従いなさい」という言葉を聞きハッと目が覚め、それまでどうしても認めることができなかったキリストの存在を間近に感ずることができました。これまで私は神に背を向けて生きていたのです。神は今も生きていて自分は神に生かされている、イエス・キリストも生きていて自分と共にいて下さる方であることが直感的に理解できました。また、同時に今まで自分が神から離れ、自分の人生や物事が自分の力でどうにでも出来るという傲慢な考えであったことを示され、この私の罪のためにキリストが十字架に付けられ、私の代わりに死んで下さったことを知り、深く悔い改めま

した。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ一一：二八）」と聖書に書いてあるように、自分の背負っている暗い過去をすべて投げ出し、新しい人生を歩むことができるという喜びに満たされました。

教会へはその年の四月二九日から、私がキリスト教に接する機会を与えてくれた大学生の母教会である、東京の保谷市ひばりが丘（現在は西東京市）にある教会へと導かれ、筑波から片道三時間の道のりを毎週通い、その年の一二月に洗礼を受けました。

Q）なぜ、東京の教会へ通ったのでしょう？

またその年の夏には牧師の薦めで長野県の松原湖でのバイブルキャンプへ参加し、妻と知り合う機会が与えられました。翌年の春に、まだ私は学生の身でしたが、妻と結婚し、貧しいながらも小さな家庭を持つことができました。

その後博士号をとり、コンピュータメーカの富士通研究所に就職し、四年間企業戦士として働くうちに大学への道が開かれ鹿児島大学、国際基督教大学を経て愛媛大学へと導かれ、今年の三月で定年を迎え、四月からここにいます。

富士通から鹿児島大学へ行くために最初の退職をしましたが、退職を認められるまでに六ヶ月を要しました。最後の一週間は会社に自分の机や椅子が無いという状況まで経験しましたが、これらの出来事を通して、人間的には解決できない困難に直面し、ひたすら祈り求める姿勢を学ばされました。

このように、何度も退職し新しい地での生活を送ることになりましたが、その度に不思議なことが起こりました。

伝道者の書三章一一節には**「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」**と書かれています。神の介在なしには起こり得ないことや、必要十分な時に神の力が働くことを直接体験することができました。

これからも神に信頼し歩み続けたいと考えています。

ところで、皆さんの人生はどちらでしょうか？ウミガメの人のようでしょうか。それとも神を信じ共に歩む人でしょうか。

どちらを選ぶかは皆さんの自由ですが、神を信じて歩む人生を選んで欲しいと望んでいます。

（二〇二三年一一月一四日）

アドヴェント・チャペルⅠ

必然の「たまたま」

―ＳＤＧｓをベースとした海外医療協力の視点から

ルカによる福音書　一〇：二五―三七

よきサマリア人

医療法人鶯友会牧病院　医師

宮　川　眞　一

ルカ福音書の「善いサマリヤ人」のたとえの中に「たまたま」という言葉が出てくる。あまり注目しなかったこの言葉だが、私には最近とても気になる言葉になってきている。私の最初の「たまたま」は、出身教会で出会った岩村昇医師である。当時、氏はＪＯＣＳ（日本キリスト教海外医療協力会）からネパールに派遣されて結核対策医療を展開され、その後世界の予防医学の礎を作っていく最中であった。その帰国の際には教会や小学校などで報告会をされていた。

講演会でいつも話すトピックの一つは、この「よきサマリア人のたとえ」を通しての話であった。

『ネパールは山の国である。先生は、ある日、山の上の村で、すぐに入院治療の必要な患者さんに出会う。自分たちは医療器具などをたくさん運んでいたので余裕がない。

「たまたま」麓の町に用事があるという村の青年に、この病気の患者さんを、どうか病院まで連れていってくれと頼む。青年は二日も三日も、その患者を背負って山を三つも越えて病院にたどり着き、お礼を渡そうとした。と、その時彼は言った。「ドクターお金なんていりません、私は若いので自分の元気を少し分けただけですよ。それはサンガイ・ジウナコ・ラギ　みんなで生きるためにしたことですから」そう言って去って行った。お金をもらっていれば、いい服や靴も買えたかもしれない、おいしいものも食べられたかもしれない。でも、いらないと言って去って行った。』

それを見た岩村医師は、この青年に「善きサマリア人」の姿をダブらせ、必要なのは「上から下への援助ではない」「生きるとは、弱きものと分

かち合うことだ」ということを学んだ。以後この「みんなで生きる」＝「共に生きる」という考え方はＪＯＣＳが最も重要だと考え引き継がれている姿勢となり、一九六〇年に創立以来、一貫してお金や物を送るのではなく、人を送り、特に「草の根」と呼ばれる人々と苦労を分かち合う中で、共に考え、共に働く姿勢を貫いている。

私の心に響いたこの話を、当人から何度も聞く中で「たまたま」は「たまたま」ではなくなってしまった。

宇和島東高の放送部の部室でのある夜、一人残ってラジオ番組の編集をしていた時、テープライブラリーの本棚に「たまたま」目をやると「岩村昇博士講演会」の文字が飛び込んできた。ヘッドホンで聞いた一時間以上に渡るその録音が自分の生き方を決める「必然」と変化した瞬間だった。結果、関西学院の神学部を経て医学部にすすむ人生へとつながる。神学部時代、釜ケ崎や自治会などいろいろな場で「たまたま」であった人々から、その後の人生に大きな影響を与えられた。

その中でもアジア国際夏期学校を通じて、大学時代に希望していなかったバングラデシュに行ったことは大きな「たまたま」であった。

そこで見たものはテレビや本で読むのとは違う悲惨な現実であった。目の前で人が死んでゆく、幼い子供が病気で運ばれてくるが、手遅れで、何も手を施すことができない……技術や経験を持たない者の無力感。それが私とバングラデシュとの最初の出会い（四〇年前）であった。

そして、やはり自分は技術、それも直接人と関わる技術を身につけて、ここに帰って来たいと思った。これも「たまたま」が必然へと変化した瞬間であった。その後、このたまたまの必然に乗っかり七年間バングラデシュで働くことができたのだと思っている。

＊バングラデシュはどういう国？

1）モハメド＝ユヌスさんは、マイクロクレジットという貧しい人たちへの少額融資の制度を活用しノーベル平和賞を受賞した。

これはＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）では目標の一番「貧困をなくそう」に該当する。

「サイクロンの被災地」としても有名。

二）インドの東どなりにあり、一九七一年に独立した若い国。

毎年、雨期には洪水の被害がでて、雨季には国土の三分の二近くが水に埋まるといわれる。

三）独立当時は世界の中でも貧しい国「最貧国の一つ」。人口密度が高く、最近では経済発達ではNext 11に入り注目を浴びている国でもある。

四）九〇%以上がベンガル人で、国の宗教は、イスラム教。

五）共通言語はベンガル語で、私もベンガル語で仕事をしていた。

私の働いていた病院は、バングラデシュの中でもチッタゴン丘陵地帯と呼ばれ少数民族が多く住み、この国の中でも特異な、ムスリムの他、仏教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒が混在し、宗教的にも政治的にも複雑な地域にあった。

又、ここはお医者さんや病院が少ない地域・医療過疎が激しい所でもあり、さらに悪いことには、マラリアという危険な熱帯病がたくさん発生するところでもあった。

この病院の病棟にはいつも、マラリアの患者さんが入院していた。マラリアは蚊を媒介にして感染する病気だが、その中でも一番恐ろしいのは「熱帯熱マラリア」という種類である。これは、治療が手遅れになると脳性マラリアといって、頭にマラリアが感染してしまい、時には死にいたるものである。

ある日、お兄さんに連れられた意識不明のビジョィという名前の一一歳の男の子が運びこまれてきた。お兄さんは多分、日本なら高校生で一七、八歳だと思うが、五時間も六時間もかけて自分たちの村から、弟のビジョィを背負ってやってきた。トンチョンギャという民族で、多くの人は仏教徒である。お兄さんは、私にいう。

「ドクター、弟を助けてくれ、そのためだったら僕はなんでもする。弟が治ったら、僕は出家して人のためにつくす人生を選択する。だから、なんとかしてくれ。」

意識不明で高い熱……脳性マラリア……を疑う。検査をすると残念ながら予想はあたり、すぐ

に、できる限りの治療が始まる。治療のおかげで、翌日、ビジョィは意識を取り戻した。翌日は、朝から忙しく、私が回診に回ったのは昼過ぎだった。病棟を覗くと例の兄弟の姿がみえない、ベッドも空。バングラの患者さんは、入院費が高くなると大変なので、少しよくなると自主退院することが、よくある。

あー又、行っちゃんたんだな、よくなるまで居ろと言ったのに……。と思いながら、看護学生に聞いてみた。

「あの患者さん、帰っちゃったの?」

「いえ、ドクター、今朝早く亡くなったので、朝のうちにお兄さんが、村に連れて帰りましたよ。」

「夜中の回診では、眠っていたようでしたが、朝、呼吸が止まっていました。担当のドクターも死亡確認をしただけです。」

私は、いろいろな思いに言葉を無くしてしまった。

なぜ、もっと早く気づいてやれなかったのか、なぜ、自分は傍にいて、やれなかったのか、もっと早く治療が始まっていれば、死ななくても済んだかもしれないのに。

あの出家するといったお兄さんは、どんなに辛い思いで「弟の死」を見つめていたのだろうか。

実は、この病院では、このように手遅れでやってくる患者さんは、たくさんいる。

手遅れになる原因は、解熱剤だけで頑張ってみたり、病院が遠いために交通費の工面がつかなかったり、理由は様々である。しかし、早く発見して、正しい治療ができれば、死ななくてよい命は、本当に、たくさんある。

今、この病院では、遠い村に住む「お母さん」を訓練して、看護師さん・保健師さんのような仕事をしてもらっている。その中でも彼女たちの大きな仕事は、熱の急に高くなった人の血液検査をしてマラリアかどうかチェックしてもらうことである。

もし、マラリアだったら、彼女たちが持っている薬を、前もって決められているとおり患者さんに出してもらう。第二第三のビジョィやお兄さんをつくらないためである。

この働きはＳＤＧｓでは目標の三番「すべての人に健康と福祉」の部分に当たる。

その中でＵＨＣ（Universal Health Coverage）「保健医療サービスが身近に提供されていること」「保健医療サービスの利用にあたって費用が障壁とならないこと」の必要性は、新型コロナウイルスの流行に対してワクチン供給の平等性を訴える大切な概念となってきている。

しかし、このような病魔に対するのと同様に、しかも深刻に繰り返されている別の闘いがここにはある。それは、貧困との闘いであり、ＳＤＧｓでも一番に置かれる所以であろう。都会ではＣＴやＭＲＩを常備した私立の医療検査センターが乱立し、高い検査費用を出し「教授」と呼ばれる専門医から治療が受けられる富裕層も多く出てきている。

その一方、治療半ばで、私たちの病院を去り村に帰っていく患者さんを何人も見送った。痛みが強くなり、呼吸困難にも、そして食事もとれなくなるかもしれない。しかし、お金が続かない。亡くなってからでは村に連れて帰れない。その様な風習もあったりする。限られた治療の後、看取りを選択した家族の心中を、計り知ることは難しい。

コロナ禍では、この格差は残念ながら、さらに顕著となってきているようだ。栄養失調の子供の母親に栄養指導をしても、職もなく自給自足に近い生活の人たちに「それを買うお金はない」と言われれば、どう答えればよいのか。

ここでは、医療の問題は、貧困や経済的自立の問題とより深く結び付き、独立して考えることはできない。

本日、お読みした聖書「よいサマリア人のたとえ」での中でイエスは、律法の専門家＝ユダヤ教の戒律（きまり）に詳しい先生たちとのやり取りの中で、その律法学者に「最も重要な掟は、『心・精神・力・思いを尽くして神を愛すること』そして『隣人愛』」であると語らせる。

しかし、そこには彼らの教条主義（建前を重視して実を伴わない）への反論が根底にあり、最終的にこの「サマリヤ人のたとえ」を通して「誰が、その人の隣人になりえたか（なることができたの

か）」と問い直し、わけ隔てのない愛の実践こそ重要なのだと語る。

だれが隣人で「あるのか？」ではなく、誰が隣人に「なることができたか？」と聞いている点が重要なのだ。

今回は、この物語の中身の「たまたま」に注目して、もう少し詳しく見ていくことにする。

盗賊にやられ、傷ついた、多分ユダヤ人であった旅人を、「たまたま」出くわした祭司やレビ人は「道の反対側」を通って見捨てて行く。

神殿での仕事を終えて、住んでいるエリコに帰る途中という設定か。実際には二五㎞ほどの山道・荒野で、盗賊が暗躍するところだったようだ。祭司やレビ人は、当時の宗教的指導者で、人に道を説き、知識もあり、人々から尊敬もされる立場だった。自らも、きっと徳を深めた人たちであっただろう。しかし、職務や時間を優先させ「道の反対側」を通って行った。

「助けている間に、盗賊がやってくるかもしれない・危険だ」「血に触ってはいけないという規則に反するから」あるいは「だれかがやってくれるから」「自分には、もっと重要な職務がある」そう思ったのかも知れないし、「たまたま」なので自分を納得させてスルーしたのかもしれない。

しかし、歴史的に、いろいろといざこざがあって敵対関係にあったが、これもまた「たまたま」出くわした旅人をサマリア人は、いつもユダヤ人から軽蔑される側だが、「そんなことは関係ない、とにかく助けなきゃ」。そう思ったのか？突き動かされる気持ちで、「道の同じ側」に行き、危険をおかして、この旅人に近づき、素早く手当てをする。

さらに自分の時間やお金を提供する。お金は、今の金額で二万円くらいだろうか？足りなかったら、もっと払うとまで、多分なじみの宿屋の主人に伝える。

どうして、このサマリヤ人は、時間やお金を費やし、危険を冒してまで、「タマタマ出会った」この同胞でもない、傷ついたユダヤ人と道の同じ側を、共に歩んでいったのか。

同じ「たまたま」出くわした人にたして、違いを示し、イエスは現代を生きる私たちに何を言い

たかったか？

ここで「サマリア人」を象徴しているのは「弱い立場」を生きている人たちのことではないか？サマリヤ人は立場的には「弱いという現実」をかかえながら、行動についてはじつに勇敢であった。社会的に「強い」立場にいる人よりも「弱い」立場にいる人のほうが、他者の痛みを的確に感じ応答もする、とイエスは言っているのかも知れない。

イエスにとって重要なのは、この世で力を持つことではなく、隣人としての「ちから」を発揮できるかどうかということなのであろう。弱いものが、隣人との繋がりにおいて「ちから」を発揮すること、すなわち、それは未知なる他者との繋がりにおいてこそ、さらに深く培われるのかもしれない。

タマタマを行動に結びつけるのは確かに大変なことである。この聖書の箇所を読むとき、それができなくて、辛い思いになってしまう事もあるかもしれない。しかし、多分イエスは背伸びしておこなう奉仕を私たちに強いているのではないと思う。出来ることを、出来るところで、出来る範囲で行うことが大切なのではないか。

実は、サマリヤ人も自分の仕事をやめて、ずっと傍で介抱していたのではないのであるから。重要なのは、今、この場から逃げ出さないことではないだろうか。そして、私たちが、ちょっとの勇気を出して、苦しんでいる人たちに近づいていき、隣人になり得ること、それが「たまたま」が自然に必然とされていくことなのではないだろうか。そして、もしかしたら、その「たまたま」は「必然」を用意されている「たまたま」かもしれず、その場には多分、私たちの傍に立ち、その場から、押し出してくれる力が存在するのかもしれない。

今日最後の「たまたま」を紹介する。

ＳＤＧｓの一六番目のテーマは「平和」である。ウクライナは今も激しい戦況下に置かれている。

私が理事を務めるアジア協会アジア友の会の事務局近くに「たまたま」ウクライナ避難民の加藤

カテリーナさんが住んでいた。彼女はウクライナ日本友好協会の会員で、自分の出身地のウクライナ・ロシア国境地帯に近いスームィ州トロスタネツカの出身であった。その市立病院のオペ室がロシアのミサイルで破壊されたのを聞き、私達は外務省の資金を利用してその復興事業プロジェクトを推進している。一方、彼女自身は、大阪でウクライナレストランを開き、避難民の雇用と相談と憩いの場を提供しようとしている。

そしてまた、「たまたま」復興プロジェクトで協働している別のカテリーナさん、花村カテリーナ心理士を松山にお招きしてお話を聞かせて頂いた。

彼女の本業は日本の看護学校の助教で、両親はキーウ在住、毎日緊張状態にあるにもかかわらず、避難民に対するカウンセリング活動もしておられる。

彼女が今回残してくれたメッセージは「支援してくれる人」以上に「一緒に何かができる人」の存在「普通をともに生きる人」の存在が嬉しい。

そして「心の中にウクライナの居場所を作って欲しい」ということであった。

世界で起こっている紛争の地域、それぞれのことを思い、それぞれの場での「たまたま」から、少しの勇気を持って、希望・平和へと向かわせる「必然への働き」として、発展・協働していければ幸いである。

（祈り）

「在天の父なる神様、今日、この時を感謝いたします。

あなたが、いつも共に居て、私たちが隣人の居る側を、ただ眺めるだけでなく、あなたから与えられた「たまたま」を、より心の目を開かせ、見極め、実際に「必然として」共に歩めますよう、力と勇気を与えて下さい。この一言の祈り、主イエスキリストの御名を通して、御前に、お捧げいたします。アーメン。」

（二〇二三年一一月二八日）

アドヴェント・チャペルⅡ

さがしあてたのは

日本キリスト教団松山教会　牧師／
女子大学・短期大学非常勤講師

上島一高

マタイによる福音書二：一－一二

クリスマスといっても、いろいろな伝統があって、しかも古い伝統から、比較的新しいけれどもすっかり伝統になっているものまであります。また、ある地域のものが、別の地域に広がってそこで伝統になっているものもあります。クリスマスツリーがプロテスタントの十八番（おはこ）で、カトリック圏では決して一般的ではなく、近代になってからようやく登場しているのは、その一例です。

カトリックの十八番は「クレーシュ・ド・ノエル」。文字通りにはノエル＝クリスマスのクレーシュ＝飼い葉桶。「ノエル」と言えば、むしろ、「ビュッシュ・ド・ノエル」の方が有名かも知れません。ノエル＝クリスマスのビュッシュ＝木（丸太）、あの美味しいケーキ。でも今は、最初のクリスマスのシーンのミニチュア「クレーシュ・ド・ノエル」のお話です。

◆八〇〇年前一二二三年のクリスマスのこと。イタリアのアッシジにフランチェスコという修道士がいました。当時のキリスト教界が力と金、贅沢に流れるのとは逆に、貧しく清くイエスの道そのままに生きる彼は、イエスが家畜小屋で最も貧しい者として生まれたことを思い巡らし、本物の飼い葉桶や敷き藁、雄牛やロバを用意してミサ（礼拝）に参加しました。

想像してください、この舞台に本物の生き物がいることを。私自身、二〇一〇年のことですが、ドイツのオーバーアマガウ村で、一〇年に一度、村人たちによって演じられるクリスマス劇ならぬイエスの受難劇を観ましたが、生きたロバが登場し、服装も貧富の差を表現するリアルなものでした。クレーシュ・ド・ノエルに戻れば、実物を用いたイエス降誕場面が箱庭のようにミニチュア化するのは一五六二年で、三四〇年も後のことです。

◆四本のろうそくに一本ずつ灯りを点して幼子の

到来（アドヴェント）を待つ季節に合わせて飾られるこのミニチュア、唯一の建物は家畜小屋です。シーンの中心にはマリアとヨセフと赤子がいます。彼らは住民登録をせよとのローマ皇帝の命令で、遠くからヨセフ先祖の町ベツレヘムに身重のマリアと来たものの、泊まる宿なく、家畜小屋で子を産み、飼い葉桶に寝かせているのです。

彼らを囲むのは家畜たち。そこに、野原から天使のお告げを聞き、羊を連れてやって来たのは、町の人々から見下されている羊飼いたち。これが、福音書の伝えるままであるとすれば、後の教会は、そんなあるがままの彼らをキラキラにし、場面の意味を変えてしまったのかもしれません。フランチェスコが「イエスが家畜小屋で最も貧しい者として生まれた」ことを取り戻そうとして、あのような挙に出た理由が分かるというものです。

◆さて、登場人物たちには共通点があります。皆、「これが自分たちのための徴である」ことを心に留めているということです。羊飼いたちが天使の御告げを受け止めなければ彼らは「クレーシュ・ド・ノエル」にはいません。そもそも、マリアがヨセフによらず、神からの幼子を宿すことを、二人して、天使の御告げとして受け容れていなかったら、彼らすらそこにいないのです。

全ての者が、天使の御告げを心に留めていなかったら……。あの家畜小屋では動物たちが、変わらぬ日々を送り、飼葉桶に首を突っ込んで藁や草を食んでいます。各地から住民登録のために故郷を訪ねて宿屋を賑わしていた旅人も——ヨセフは誰の子か分からない子を宿したマリアと離縁して一人旅をし、登録を終えると宿賃を払って町を去り、ベツレヘムには日常が戻るのです。

大切な徴が現れても、それに心を止め、思い巡らすことがなければ、自分にとって、その徴は「ない」に等しい。方や、本当には大切と言えない様々な関心事に「お腹いっぱいになって」しまっています。これでは、本当に大切な徴にも気づかないか、すぐ目を離すことでしょう。

◆ここで、話題を「クレーシュ・ド・ノエル」に必要不可欠な最後のピース（駒）に移しましょう。それは、東の国の三人の博士です。来週のチャペルで、お隣の附属幼稚園のこどもたちによってクリスマス・ページェント（降誕劇）が上演されま

すが、博士たちに触れておかなければ、わたしたちのことを忘れているよと言われてしまいますね。実は、私自身、幼い頃、高松市内のキリスト教主義の幼稚園で三人の博士の三番目の役を務めていますから、忘れるわけにはいきません。

彼らは不思議な星が現れたのを見て、それだけでなく多くの星が現れては消えていたにも拘わらず、この星目あてにはるばる旅をします。そして、ユダヤの都エルサレムにヘロデ王が増築した華麗な宮殿を訪れて、星が指し示す喜ばしい知らせの在り処を尋ねるのです。しかし、それは王宮ではありませんでした。博士らの言葉に、王は、自分に取って代わる不吉な者の出現を案じ、住民もそれによる政情不安を恐れます。

やがて、疑心暗鬼はイエスと同じ年頃の幼子を殺せという残虐な命令へとつながりますが、そのことは、それだけでまた大きなテーマになるので、今日はさておきます。しかし、そのような出来事が今日まで、変わることなく世界史において繰り返されていることだけは押さえておきましょう。そのような未来を孕みつつも、博士たちは、王宮を離れて、鄙(ひな)びた町に向かいます。

◆星が彼らを誘った先は、王宮とは比べ物にならない「クレーシュ・ド・ノエル」でした。彼らの身を包む礼装は立派なものでしたが、そんな彼らが、ロバたちの声がし、それらしき臭いもし、おせじにもきれいとは言えない場所に来て、膝を屈め、黄金（金）・乳香（高価な香料）・没薬（防腐・薫香料）を差し出している図を想像してください。

この対比は、決して、そんな立派な人が拝むくらいイエスは偉いのだと言おうとしているのではありません。博士らとしては、そのような服を着て、用意していたこの世で最も高価な物を贈るのですが、それすら、何か似合わない、それを超えた、何か、本当に大切なものが、この世にはあるということをこのシーンは、今も、わたしたちに伝えているのです。

星の導きという徴に目を留めて、何かを尋ねて旅をした博士は「クレーシュ・ド・ノエル」へと辿り着きました。同じくそこを探し当てたマリアとヨセフ、野原の羊飼いたち、またこのことを告げた天使、この光景を喜ぶ動物たちと共に、ミニチュアの人形として、変わらぬノエルのピー

ス（部分）となっています。おっと忘れてはいけない。飼い葉桶の赤ちゃんイエスこそは「ラストピース」です。

◆クリスマスが終わると、「クレーシュ・ド・ノエル」は片づけられます。マリアとヨセフと幼子は、危険を避けながら、ヨセフが大工として働くガリラヤのナザレ村に帰ります。マリアは幼子の歩みを心に納めつつ歩みます。羊飼いは点った灯を賛美の声に変えつつ、野原から野原へ羊を引き連れます。博士らはヘロデ王宮に寄らず国に戻り、本当の王（メシア）の姿を考えます。

アッシジの聖フランチェスコは、華やかな祭服を脱ぎ、生成りの服に帯を締めただけの形(なり)をして、人と人とを隔てる壁を乗り越えて隣人と出会い、人と自然との違いを越えて鳥に草花に話しかけます。それは、あの幼子が成長して、生涯、最も貧しく、低く生きる中で、全てを繋ぎ、神の御心を現された様に倣ったものでした。

◆さあ、来週の幼稚園児たちのクリスマス・ページェントを観る準備は整いましたね。皆で、子どもたちのメッセージを聞きましょう。

（二〇二三年一二月五日）

二〇二三年度　チャペル・アワー行事

全学（火曜日）

司式　蔵前　知美（女子大学　心理福祉専攻　教員／キリスト教センター長）
　　　加納　　章（短期大学　保育科　教員）
祈祷　上島　一高（日本キリスト教団松山教会　牧師／女子大学・短期大学　非常勤講師）
奏楽　河内　奈穂（短期大学　保育科　教員）
　　　明本　　遥（女子大学　子ども専攻　教員）

月日	行事・題	講話者
4月11日(火)	二〇二三年度始業チャペル 〈新入生歓迎チャペル〉 「ひとつの希望に」	女子大学・短期大学　学長　高橋　圭三
18日(火)	〈イースター・チャペル〉 「よみがえった声で」	日本キリスト教団松山教会　牧師 女子大学・短期大学　非常勤講師　上島　一高
25日(火)	「注意したい消費者トラブル」 「薬物乱用防止」	愛媛県消費者教育推進専門員　橋本　伸一 中予保健所企画課医療推進係　石丸　宗徳
5月9日(火)	〈開学記念チャペル〉 「私のお金との付き合い方」	松山東雲学園　理事長　丸木　公介

16日(火)	「職業のトラブルに関する労働相談事例等の紹介」 学生総会・学生会認証式	愛媛県労働委員会　会長　村田　毅之 学生会
23日(火)	〈牧師招待チャペル〉 「どう生きるか」	医療法人聖愛会松山ベテル病院 チャプレン　佐々木真理
30日(火)	〈前学期防災訓練〉 「命の教育」	松山市南消防署　森田　裕貴
6月6日(火)	「二宮邦次郎賞」授与式	女子大学副学長　水代　仁
13日(火)	「救急車の適正利用について」 「大学生等消防団員の募集」	松山市消防局　救急課　壷内　和樹 横本　哲斎 地域消防推進課　吉村　真子
20日(火)	「分かち合う共同体を目指して ～教会こども食堂とフードバンクの取り組み～」	日本キリスト教団三津教会牧師 森分　望
27日(火)	〈前学期終業チャペル〉 「女性のからだに関する講話」	松山市こども家庭部保健所 すくすく支援課　田内　萩子 野口真理子　山下日菜子 渡部　恵子 松山市保健所　助産師　小川加代美

10月3日(火)	〈後学期始業チャペル〉 「大きいことはいいこと？　小さなオルガンの話」	日本キリスト教団松山教会　牧師 女子大学・短期大学　非常勤講師 上島　一高
10日(火)	「二宮邦次郎先生と今治の企業家活動 ―海事産業やタオル産業に残る軌跡―」	短期大学　現代ビジネス学科　教員 西岡　久継
17日(火)	〈平和学習〉 「平和のシンボル」	日本ホーリネス教団広島福音教会　牧師 加藤　望
24日(火)	〈人権セミナー〉 「性の多様性について考える」	松山市人権啓発課指導員 福岡　靖二
31日(火)	〈松山東雲学園創立記念フォーラム〉	松山東雲学園　同窓会　会長 菅田　栄子 日本キリスト教団松山教会　牧師 女子大学・短期大学　非常勤講師 上島　一高
11月7日(火)	〈秋季特別礼拝〉 「デートDV防止について」	愛媛県人権擁護委員 石丸ひとみ
14日(火)	「ウミガメのスープ」	女子大学　心理福祉専攻　教員 中川　祐治

28日㈫	〈アドヴェント・チャペルⅠ〉 「必然の「たまたま」 —ＳＤＧｓをベースとした海外医療協力の視点から—」	医療法人鶯友会牧病院　医師 宮川　眞一
12月5日㈫	〈アドヴェント・チャペルⅡ〉 「さがしあてたのは」	日本キリスト教団松山教会　牧師 女子大学・短期大学　非常勤講師 上島　一高
12日㈫	〈アドヴェント・チャペルⅢ〉 クリスマス・ページェント（降誕劇）	松山東雲学園附属幼稚園　年長組
19日㈫	二〇二三年度終業チャペル 〈クリスマス・チャペル〉 「思い巡らして」 松山東雲学園同窓会　「雪びら奨学金」授与式 学生総会・新学生会認証式	松山東雲学園　同窓会　会長 菅田　栄子 学生会

黎　明（しののめ）

（チャペル・トーク集十号）

二〇二四年三月発行

松山東雲女子大学
松山東雲短期大学
キリスト教センター

松山東雲女子大学・短期大学　キリスト教センター